

### 韋應物 悼亡詩論(承前)「古詩十九首」との 関わり(其の2)

KURODA, Mamiko / 黒田, 真美子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2014-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010544>

# 韋應物 悼亡詩論（承前）

——「古詩十九首」との関わり 其の二——

黒 田 真 美 子

拙論は、西晋・潘岳（二四七～三〇〇）に始まる悼亡詩の系譜の中で、初唐・盛唐における作品は皆無にもかかわらず、中唐・韋應物（七三五～七九〇？）の悼亡詩（亡妻を悼む詩、以下「韋悼」と略す<sup>1</sup>）が、突如、質量ともに豊かな作品群として出現し得たのはなぜか、という問題について論考を重ねてきた<sup>2</sup>。妻に対する愛情とその喪失の悲哀がパトスとなっているのは当然のことながら、考察の結果、明らかにしたのは、彼が先行の悼亡詩および哀傷作品を模擬することによって詩境を広め、多様性を実現したことである。したがって、その模擬性はいかなる特質を有し、それは何を意味するかについて、分析するべきであろう。その際、「韋悼」と深い関わりがあり、看過し得ない作が、「古詩十九首」（以下、「古十九」と略す<sup>3</sup>）である。其の一において、第一章では、「明月皎夜光」（古詩十九首）其の七、「古七」と略す。以下、同じ）との関わりを分析して、「古十九」の淵源とされる『詩經』を原拠とする詩語が「古十九」を媒介させることで意味を変換させて用いられているということ、第二章では、「凜凜歲暮」（古十六）との関わりを中心として、「古十

九」を原拠とする詩句や表現が潘岳哀傷作品の波動を受容して踏襲されているという重層性、また「古十九」と関連の深い「長門賦」や西晋・陸機（二六一～三〇三）の「擬古詩」の詩句をも襲用するという複合性を指摘した。これらの特質は、「韋詩」の質量ともに突出した出現の遠因とみなせよう。其の二においても、右の命題について、さらに考察を深めたい。

## 第三章 「古詩十九首」其の二「青青河畔草」との関わり

韋應物作品の特色の一つとして、疊字の多用ということをすでに指摘したが<sup>4</sup>、後述の如く、悼亡詩においても少なからず看取される。また「古十九」における多用は、各注釈書も指摘する<sup>5</sup>。中でも「古二」「青青河畔草」が、次のように、六種の疊字を句頭に揃えて連用していることは、韋應物の関心を引いたであろう。

- ① 青青河畔草 青青たり 河畔の草  
 ② 鬱鬱園中柳 鬱鬱たり 園中の柳  
 ③ 盈盈樓上女 盈盈たる樓上の女  
 ④ 皎皎當窗牖 皎皎として 窓牖に当たる  
 ⑤ 娥娥紅粉粧 娥娥たる紅粉の粧よそおひ  
 ⑥ 織織出素手 織織として素手を出だす  
 ⑦ 昔爲倡家女 昔は倡家の女  
 ⑧ 今爲蕩子婦 今は蕩子の婦  
 ⑨ 蕩子行不歸 蕩子 行きて歸らず  
 ⑩ 空牀難獨守 空牀 独り守ること難し

当該作も、「古16」と同様、遠路出かけたまま帰らぬ夫（「蕩子」）を一人待つ「思婦」の詩であるが、「古16」が一貫して「我」（⑥）「同袍與我違」という妻自身の一人称の視点から詠まれるのに対して、この妻は、「樓上の女」という三人称によって描かれている。その結果、客観的形象化が可能になり、その姿を③④⑥の句頭に疊字を連ねることで、鮮やかに浮かび上がらせる。この四種の疊字の意味は、「古十九」中のほかの用例や、各注釈書を参照にすれば、「盈盈」「皎皎」は、豊かで輝くばかりの風姿を表し、「娥娥」は、容貌の美しさ、「織織」は、ほっそりしたなやかな白い手を形容する。一見、無造作に重ねられたかのようであるが、前の二種は、女性の存在が放つ光沢のある麗しき、後ろの二種は、身体の部分に絞って、紅と白の色彩的効果をも加味しながら描出されている。さすれば、第一聯の「青青」「鬱鬱」の疊字も、色彩と

光（明度）の対比が意識され、第二聯への自然な流れを生み出している。馬茂元が説くように、「青青」「鬱鬱」という春の生き生きとした植物の様態が「樓上の女」の「盈盈」とした豊かな姿態を詠い興す興的機能とともに、「青青」という疊字の持続作用の果てしなさは、遠行して帰らぬ「蕩子」への綿々たる思いの比喩的表現にもなっている。第二句と同様の詩句を用いた古楽府「飲馬長城窟行」（『文選』卷二十七）が「青青たり河畔草、綿綿として遠道を思ふ」と詠うように<sup>7)</sup>。そして河沿いに青々と広がる草原から、河の流れに誘われるようにこもり暗く茂る園中へと視線が移り、さらに楼閣と窓辺の女性へと焦点が絞られていく。まさに清・顧炎武が「六疊字を連用するも亦た極めて自然なり。此れより下れば即ち人の継ぐ可き無し」と説く通りである<sup>8)</sup>。

疊字は、顧炎武の言及する如く、『詩經』「衛風 碩夫人」の六種連用以来、主に擬音語、擬態語の機能や、「感情の流出をより流暢にする」<sup>9)</sup>効果を有して、韻文の中で「韻律美と修辞美」を表現してきた。韋應物もその効果を熟知し、「韋悼」においても多用している。今、紙幅の都合で「古十九」と同一の詩語のみを挙げて、簡潔に「古十九」と比較する（「韋」下の算用数字は、注②）に挙げた「韋悼」の通し番号<sup>10)</sup>。

〈查查〉「查查日云夕、鬱結誰爲開（查查として日云に暮れ、鬱結誰が為にか開く）」（韋4）、「冥冥獨無語、查查將何適（冥冥として独り語る無く、查查として將何くにか適かん）」（韋10）―古13「下有陳死人、查查即長暮（下に陳死の人有り、查查として長暮に即く）」―古13は、「郭北の墓を望」んで人生無常の感慨を詠み、「查查」は「長暮」という明けることのない死の世界を形容する。「韋悼4」もそれと関わりなが

ら、時間的空間的に薄暗い様態を表し、10では、心情表現になっている。  
 「蕭蕭」は、草5・16―古13・14。すでに第一章第二節で論究したの  
 で、省略。

〔迢迢〕 「迢迢芳園樹、列映清池曲（迢迢たり芳園の樹、列ねて清池  
 の曲に映す）」（草7）―古10 「迢迢牽牛星、皎皎河漢女。織織擢素手、  
 札札弄機杼（迢迢たり牽牛星、皎皎たり河漢の女。織織として素手を擢  
 げ、札札として機杼を弄す）」「古10」は、織女の牽牛星への切ない思い  
 を詠い、「迢迢」は、果てしなく遠い広がりを表す。「草悼」は、天界を  
 大地に変換し、スケールも小さい。

〔戚戚〕 「庭樹轉蕭蕭、陰蟲還戚戚」（「庭樹転た蕭蕭、陰虫還って戚戚」  
 （草16）―古3 「極宴娛心意、戚戚何所迫（極宴して心意を娛ましめば、  
 戚戚何ぞ迫る所あらん）」「古3」は、短い人生ゆえに「極宴（極上の宴  
 会）」を楽しむもうと詠い、「戚戚」は、憂愁のさまを意味する。「草悼」  
 では、擬音語として用いられ、寂寥感を醸し出している。

〔茫茫〕 「感感居人少、茫茫野田緑（感感として居人少なく、茫茫と  
 して野田緑なり）」（草25）―古11 「迴車駕言邁、悠悠涉長道。四顧何茫  
 茫、東風搖百草（車を迴らし駕して言に邁き、悠悠として長道を渉る。  
 四顧するに何ぞ茫茫たる、東風百草を揺るがす）」「兩篇とも草原の緑が  
 遠くまで広がっている様子を詠う。

予想に反して、同一の疊字は五種の少なさに止まり、意味的にも単純  
 なアナロジーではなく、機能や背景を変換している。それにもまして、  
 ここに「古2」の六種の疊字が、認められないのはなぜか。やはり女性  
 美を形容する四種の疊字を妻に用いるのは、憚られたのであろう。だが

はたして理由はそれだけか。「青青」「鬱鬱」をも用いないのはなぜなの  
 かを推考すべきである。

其の一で述べた如く、韋應物は、「擬古詩十二首」（以下、「韋擬十二」  
 と称す）を詠んでおり、「古2」の模擬詩其の二（以下、「韋擬2」と称  
 す）も試みている。

- |         |             |        |
|---------|-------------|--------|
| ① 黃鳥何關關 | 黃鳥          | 何ぞ関関たる |
| ② 幽蘭亦靡靡 | 幽蘭          | 亦た靡靡たり |
| ③ 此時深閨婦 | 此の時         | 深閨の婦   |
| ④ 日照紗窓裏 | 日は照らす       | 紗窓の裏   |
| ⑤ 娟娟雙青娥 | 娟娟として       | 青娥 双び  |
| ⑥ 微微啓玉齒 | 微微として       | 玉齒 啓く  |
| ⑦ 自惜桃李年 | 自ら惜しむ       | 桃李の年   |
| ⑧ 誤身遊俠子 | 身を遊侠の子に誤る   |        |
| ⑨ 無事久離別 | 事無くして久しく離別し |        |
| ⑩ 不知今生死 | 今の生死を知らず    |        |

「韋擬十二」の詳細は、第四章に譲り、疊字に限って言えば、十二首  
 のうち、疊字を最多に用いるのは、「韋擬2」である。したがって韋應  
 物が「古2」を模擬する際、やはり疊字を意識していたことは明らかで  
 ある。それにもかかわらず、「古2」の六種の疊字が皆無なのは、意  
 識的に避けたとしか考えられない。第一聯は、「古2」と同様、自然を  
 詠うが、「青青とした草」を「黄色い鳥」に変えている。「黄鳥」「關關」

は、ともに『詩經』周南の詩語であり、「古十九」が「国風」を淵源としていることを、暗に籠めているのであろう。それを押さえたうえで、「青」から「黄」へと視覚的效果を残しながら、聴覚的表現に変換している。「古2」②「鬱鬱とした柳」は、「鬱」と通じる「幽」を冠して「蘭」に変えている。植物という共通項で揃えながら、「蘭」（香草）によって嗅覚的要素を加え、「幽」という韋應物が頻用する詩語を用いて、独自の興趣を試みている。同時に「幽蘭」は『楚辭』『離騷』を想起させ、「靡靡」は、『詩經』王風・黍離を出自とする。すなわち①の『詩經』との典故対をも試みていよう。そして「關關」は、仲睦まじい番つがいのさえずりであり、「靡靡」もなよやかに寄り添うさまで、③「深閨婦」の新婚時（「桃李年」）の様子に繋がり、第一聯は、いわば興の機能を果たしている。「古2」の第一聯と同じく自然な流れとなり、先の顧炎武評を適用し得るのである。ここに基本的要素や枠組みを遵守しながらも、単純に詩語を踏襲するのではない、韋應物の変革志向を看取するのは、穿ちすぎであろうか。<sup>⑫</sup>

以上のように、「韋應物が「古2」の疊字に関心を抱きながらも、「韋詩」や「韋擬2」においては、それらを安易に襲用せず、自らの詩興に基づく新たな息吹を試みたことが明らかになった。だが「古2」において彼が疊字以上に着目したと考えられるのは、第四聯の今昔の対比（昔爲倡家女、今爲蕩子婦）である。それを明確に証し得るのは、西晋・陸機の「擬青青河畔草」（『文選』卷三十「擬古詩」十二首、其の五。以下、「陸擬5」と称す）との比較によってである。

- |         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| ① 靡靡江離草 | 靡靡たる江離の草                        |
| ② 熠燿生河側 | 熠燿 <small>ゆうゆう</small> として河側に生ず |
| ③ 皎皎彼姝女 | 皎皎たる彼の姝女                        |
| ④ 阿那當軒織 | 阿那として軒に当たりて織る                   |
| ⑤ 粲粲妖容姿 | 粲粲として 容姿妖めかしく                   |
| ⑥ 灼灼美顏色 | 灼灼として 顔色美し                      |
| ⑦ 良人遊不歸 | 良人 遊びて帰らず                       |
| ⑧ 偏棲獨隻翼 | 偏棲 独り <small>せきよく</small> 隻翼たり  |
| ⑨ 空房來悲風 | 空房 悲風来り                         |
| ⑩ 中夜起歎息 | 中夜 起ちて歎息す                       |

冒頭の「靡靡」は、韋が踏襲しており（「韋擬2」②）、「韋擬」は、「陸擬」をも踏まえていることを明示する。この「靡靡」を初めとして、四種の疊字が用いられており、中の③「皎皎」は、「古2」（「古10、19」とも）と同一である。「②熠燿」④「阿那」という双声疊韻を用いることで、少しく変化を試みたのであろうが、①②は自然を、③④⑥は女性美を形容するという構成も、「古2」に倣う。第四・五聯で女性の身上を述べて、ほっそりとした白い手で紅を引き化粧する女から、機織りの女へと変容させているが、そのほかの⑦は、「古2」の「蕩子行不歸」とほぼ同一で、⑧⑨⑩は、第二章の対象作「古16」と同様の「悲風」が吹き、「翼」を用いて孤独を表し、夜半眠れずにいる。すなわち「陸擬」は、「韋擬」に比べて、はるかに「古2」に近いといえよう。それは「韋擬」が、「陸擬」をも踏まえており、その分、「古2」との距離が遠

くなっていることにも起因する。鈴木敏雄「韋應物〈擬古詩十二首〉考」が「韋の〈十二首〉は、手法において六朝期のこの先覚（論者注・陸機）の業績を、一つの目標とした成果<sup>13</sup>」と説く通りである。韋應物が「古2」の「倡家の女」を「深閨の婦」に替えたのも、おそらくその媒介項として、機織りをする「陸擬」の「姝女」が存しているのであろう。ここにも韋應物の複合的模擬性を看取できる。ただ「陸擬」には、ひたすら〈今〉の時間しかない。韋應物は、「陸擬」を踏襲しながらも、そこでは失われてしまった昔の時間、換言すれば今昔の対比を、看過できなかったのである。ここに韋應物の時間表現への関心を明確に認められよう。

「韋詩」における「今昔の対比」については第二稿で論じたので、贅言は省く。先行研究が説くように、「韋悼」より前の悼亡詩が〈今の悲哀〉に耽溺するばかりに對して、彼が初めて過去の時間を導入し、〈幸福な昔〉と〈不幸な今〉という対比によって、〈今の悲哀〉の深さを表現した。最も簡潔な対句を挙げる。

昔出喜還家 昔は出づれば家に還るを喜び

今還獨傷意 今は還りて独り意を傷ましむ

（「韋悼3」「出還」第一聯）

「韋詩」の今昔の対比は、今昔を往還するノスタルジックな時空で、右の詩句にも明らかのように、〈昔の喜び〉と〈今の傷心〉が基軸になっている。ここでそれを再度指摘するのは、「古2」第四聯の今昔の対比に議論があるからである。清・何焯が、「是れ終身諧<sup>かな</sup>はざるなり」（『義

門讀書記』卷四十七「文選」と記すように「倡家の女」だった昔も不幸だったとする説が一つ。これに對して、吉川前掲論文は、『文選』中の今昔の対比表現八例を挙げて、それらと同様、当該聯を「昔日の幸福」と「現在の不幸」との対比と解す<sup>15</sup>。また矢田博士「〈昔爲倡家女今爲蕩子婦〉考——漢代の「倡家」の實態に即して——」は、その実態と、そこに所属する女性の境遇・身分について、『史記』『漢書』などを涉獵し、唐代の妓女の不幸な境遇と異なり、漢代の彼女らは美貌と技芸を武器にして、宮殿や権力者の邸宅での宴席という「華美な世界での活動が可能」であり、前漢武帝の李夫人らのように、皇帝や高官の愛姫にまで登りつめる可能性をも秘めた存在だったと論ず<sup>16</sup>。

翻って韋應物が、「古2」の「昔」をどのように解したかを「韋擬2」から類推すれば、単純な今昔の対比は退けられているが、⑧「身を誤り」、⑨長く離別を余儀なくされ、⑩夫の「生死」も不明な「今」に對して、美しく幸福だった⑦「桃李の年」を惜しんでいる。「惜春」の語に類して、過ぎ去ってしまった青春の幸せな時間の喪失を嘆く心情である。したがって韋應物の解釈も〈幸福な昔〉であったと理解されるが、解釈というよりも、むしろそこにこそ、彼の思いが込められているのではあるまいか。以下にその点をのべよう。

「古2」の第四・五聯は、「蕩子婦」の一人称、つまり彼女の独白と捉える説もあるが、それは、⑩「空牀難獨守」という生々しい〈今〉の嘆きの告白ゆえであろう。曹旭氏が指摘するように<sup>17</sup>、「古2」全詩中の「詩眼」はこの「守」であり、貞潔という儒教的婦徳と人間的真情とのせめぎあいによる葛藤が、進るように詠われている。すなわち「古2」

の比重は、あくまで〈今〉の不幸にあり、全詩を俯瞰すれば、⑦の「昔爲借家女」だけが、「昔」に言及しており、六種の暈字を句頭に置いた①〜⑥はすべて〈今〉の情景である。それに対して「章擬2」は、「關關」とさえずる「黄鳥」も「靡靡」となびく「幽蘭」も「桃李の年」の幸福を象徴し、「古2」「陸擬」と同じ十句構成の中、同じく①から⑥までは、逆に〈昔〉を詠んでいる。ここにも彼の〈今〉を〈昔〉に変換する意図を認め得るが、それは単なる修辞上の意欲ではなく、彼の〈昔〉への思い入れの深さの表れといえまいか。その〈昔の幸福〉を象徴する⑦「桃李」の語は、「草悼4」「冬夜」(五古八韻)にも見える。

- |         |                            |
|---------|----------------------------|
| ① 杳杳日云夕 | 杳杳として日云に暮れ                 |
| ② 鬱結誰爲開 | 鬱結 誰が為にか開かん                |
| ③ 單衾自不暖 | 単衾 自ら暖かならず                 |
| ④ 霜霰已皚皚 | 霜霰 已に皚皚たり                  |
| ⑤ 晚歲淪夙志 | 晚歲 夙志 淪 <small>ぶ</small> び |
| ⑥ 驚鴻感深哀 | 驚鴻 深哀を感ず                   |
| ⑦ 深哀當何爲 | 深哀 当に何をか為すべけんや             |
| ⑧ 桃李忽凋摧 | 桃李 忽ち凋摧す                   |
| ⑨ 帷帳徒自設 | 帷帳 徒らに自ら設く                 |
| ⑩ 冥冥豈復來 | 冥冥 豈復た来らん                  |
| ⑪ 平生雖恩重 | 平生 恩 重しと雖も                 |
| ⑫ 遷去託窮埃 | 遷去して窮埃に託す                  |
| ⑬ 抱此女曹恨 | 此の女曹の恨みを抱く                 |

- |         |             |
|---------|-------------|
| ⑭ 顧非高世才 | 顧みるに高世の才に非ず |
| ⑮ 振衣中夜起 | 衣を振るひて中夜に起ち |
| ⑯ 河漢尚徘徊 | 河漢 尚ほ徘徊す    |

先に挙げたように、①の暈字は、「古13」と同一、「日云夕」も、「古16」の「歳云暮」と類似し、「古19」との関わりが認められる。第八聯も、「古19」の「攬衣起徘徊(衣を攬りて起ちて徘徊す)」に基づき、「河漢」は、「古10」に「皎皎河漢女(第二句)」「河漢清且淺(第七句)」と見える。付言すれば、「中夜起」は、前掲「陸擬5」⑩中の詩語である。おそらく韋應物は、「冬夜」の首と尾を「古19」によって、相呼応させたのであろう。擬古詩と見まごうばかりの作であり、真ん中に据えられた「桃李」の意味も、その関わりで解せよう。①〜④は、冬の夜の悲哀を詠い、⑤で自身の老いに言及し、⑥の「深い悲哀」は、それも含むのであろう。ここに措かれた「驚鴻」(何かに驚いて飛び立つ白鳥)について、阮注は、魏・曹植「洛神賦」(『文選』卷十九)の神女の容姿の軽くしなやかな形容(其の形や翩たること驚鴻の如し)を典故とする。第二稿で説いたように、神女は思い人の死後の理想化された存在を意味するので、ここでも亡妻の比喩と解される。それゆえの「深哀」であることは、言を俟たない。妻との幸福な「桃李の年」は、「驚鴻」のように逝ってしまった妻の死によって、忽然とうち砕かれた。蟬聯体で繰り返し強調され、如何ともし難い「深哀」にどこまでも沈みゆく。この「桃李」と「章擬2」のそれとは、「惜しむ」主体(思婦と鰥夫)の性差や状況を異にしながらも、悲哀の情として通じていく。さすればこ

こに込められた「桃李」は、「韋擬」の対象である「古2」の「倡家女」との関わりで、緩やかに立ち上ってくるもう一つの幸福とその喪失を想起させる。

韋は、「深哀」に沈みながらも、⑨「帷帳」を設ける。それは「冥冥」(静かで暗い)つまりあの世からの彼女の出現を期待してのことである。

これは第二稿でも指摘したように、漢の武帝の寵姫李夫人の典故(武帝は亡き李夫人を慕い、方士に彼女を呼ばせると、「帷帳」の向こうにその姿が浮かんだという『漢書』卷九七上の故事)を踏まえている。そうなる矢田論文にもあるように、李夫人の出自である「古2」の「倡家の女」が連想される。韋應物の「古2」の〈幸福な昔〉への執着は、妻との思い出は無論のこと、その追憶の糸はさらにたぐり寄せられて、武帝ならぬ玄宗皇帝の近侍として宮殿を出入りし、特権を享受した十代後半の「華美な世界での活動」をも喚起したのではあるまいか。それが決して突飛な連想ではないことを⑤「晚歳淪夙志」が証していよう。この句は、単なる老いの嘆きではなく、安史の乱によってすべてを失った若き韋應物の挫折を意味している。「桃李」とは、その両者を含む〈昔〉であり、「晚歳」の今、「夙志」も潰え妻も亡くし、その喪失感が渾然一体となって、「深哀」のまま眠れぬ夜を過ごしているのである。

以上のように、「韋詩」の特質の一つである〈今昔の対比〉の源は、「古2」と深い関わりがあるといえよう。韋應物の「古2」への関心は、第四聯の今昔の対句に顕著であり、特に「昔は倡家の女為り」が彼自身の〈昔〉へと誘うことに模擬への意欲を喚起されたのである。その模擬詩では、冒頭六句の疊字の連用形式を意識しつつ、「古2」の疊字は敢

えて用いず、また〈今〉の背景を〈昔〉に変換した。それは単なる修辭上の意欲だけではなく、韋應物の青春と挫折、それを共有してきた妻の喪失が促したものであり、「古2」の〈今昔の対比〉に込められた悲哀に、深く共感したからにはほかならないのである。

#### 第四章 「擬古詩十二首」について

前章においても、「韋擬」を引いて、彼の「古十九」への関心が那邊にあるかを考察し、それによって、「韋悼」の特質に論及した。ここで問題となるのは、「擬古詩」と「悼亡詩」とのより精密な関わりである。いずれが先に作詩されたのかを含めて、論考する。それは「韋悼」と「古十九」との関わりを一層明確にするとともに、これまで悼亡詩の系譜の中で捉えてきた「韋悼」を、韋應物詩全体の中における、いわば横軸を用いた位置づけとして解明せんとする試みでもある。

##### 第一節 「擬古詩」十二首の主題

「古十九」の主題については、先行研究を踏まえて、第一章冒頭で、「乱世を背景にして、生別死別を余儀なくされ、時間軸の上を生きざるを得ない人生の悲哀」と述べた。「韋擬」の主題も、模擬詩である以上、基本的にはそれを踏襲するが、「古十九」に共振しながらも、そこに彼独自の想いを託した表現が付加される。彼が「古十九」の何に共感し、いかなる想いを託したのかを考察する。それは、「韋擬」の成立年代(第二節)とも関わってこよう。

「韋擬」の主題について、清・陳沆『詩比興箋』は、「茲の十二章は、情詞一貫し、皆美人天末の思ひ、蹇修（「離騷」に見える伏羲氏の臣、媒酌に巧）媒老の志なり」と説く（巻三）。詳しくは後述するが、屈原の愛国の情に喩えて、その主題は、韋の愛国の志と論じている。拙論の見解を先に述べれば、基本的には首肯し得るが、十二首すべてを貫くとは言いがたい。以下にそれを立証するが、まずは、韋の愛国の志操が看取される詩篇を挙げる。それが明確に表明されるのは、「韋擬1」である。十二首冒頭に際して、自らの信念を披歴したと考えられよう。

- |   |       |              |
|---|-------|--------------|
| ① | 辭君遠行邁 | 君を辭して遠く行き邁く  |
| ② | 飲此長恨端 | 此の長恨の端を飲む    |
| ③ | 已謂道里遠 | 已に謂ふ 道里 遠しと  |
| ④ | 如何中險艱 | 如何ぞ 中 險艱なる   |
| ⑤ | 流水赴大壑 | 流水 大壑に赴き     |
| ⑥ | 孤雲還暮山 | 孤雲 暮山に還る     |
| ⑦ | 無情尚有歸 | 無情すら尚ほ歸る有り   |
| ⑧ | 行子何獨難 | 行子 何ぞ独り難き    |
| ⑨ | 驅車背鄉園 | 車を驅りて郷園に背けば  |
| ⑩ | 朔風卷行迹 | 朔風 行迹を卷く     |
| ⑪ | 嚴冬霜斷肌 | 嚴冬 霜 肌を断ち    |
| ⑫ | 日入不遑息 | 日入りて 息むに遑あらず |
| ⑬ | 憂歡容髮變 | 憂歡 容髮 變じ     |
| ⑭ | 寒暑人事易 | 寒暑 人事 易はる    |

- |   |       |            |
|---|-------|------------|
| ⑮ | 中心君詎知 | 中心 君 詎ぞ知らん |
| ⑯ | 冰玉徒貞白 | 冰玉 徒らに貞白なり |

「韋擬1」は、「古1」（「行行重行行」）の模擬である。形式的にも、「古1」と同じく八韻、前半四聯で換韻する。内容も、ともに地理的に遠く離れ行く二人の離情を詠う。「行子」は、故郷を後にしているので、残された「君」は女性（おそらく妻）で、「行子」は男性（夫）と解するのが自然であろう。だが「古1」を模したとすれば、果たしてその解釈でよいのか。なぜなら「古1」の「君」が誰を指すか、古来、説が分かれていたからである。「古1」は、

- |   |       |              |
|---|-------|--------------|
| ① | 行行重行行 | 行き行きて重ねて行き行く |
| ② | 與君生別離 | 君と生きながら別離す   |
| ③ | 相去萬餘里 | 相去ること万余里     |
| ④ | 各在天一涯 | 各々天の一涯に在り    |

と詠い始めて、「行く」という字の重なりが、行旅の歩みと時間の堆積を如実に表し、「君」との距離が果てしなく開いていく臨場感溢れる初句になっている。第二句の「君」は、換韻後の第十三句で、再度詠われる。

- |   |       |           |
|---|-------|-----------|
| ⑪ | 浮雲蔽白日 | 浮雲 白日を蔽ひて |
| ⑫ | 遊子不顧反 | 遊子 顧反せず   |

⑬ 思君令人老 君を思へば人をして老いしむ

⑭ 歲月忽已晚 歲月は忽ちにして已に晩る

この「君」が誰を指すかについて、三種の説がある。第一説は、『文選』の六臣注で、「君」は主君であり、「遊子」（詠む主体）は、「佞人」の讒言によって放逐された忠臣と解されている。李善は、⑪句を、「邪佞の忠良を毀るを喻ふ」と述べ、それゆえ「遊子の行きて、顧反せざるなり」と注す。⑬句「思君」の五臣注は、「主を恋ふるを謂ふなり」、⑭句は、君主に忠節を尽くすのに、もはや間に合わないのではないかという恐れを詠うと説く。第二説では、前半は、旅に出た夫が、妻（君）を懐かしんで望郷の念を起こし、換韻後の後半は、逆に妻（の立場での詩人）が旅中の夫（君）を思って自らの老いを嘆く詩と説く。南宋・嚴羽『滄浪詩話』『考証』が、後半を別首として扱う『玉臺新詠』所収作（枚乗「雜詩」其の三）を指摘するが、この解釈に基づくのであろう。第三説は、清人・張玉穀や近人馬茂元、現代の曹旭の諸注で、「君」は旅中の夫を指し、家に残された妻の嘆き、すなわち「思婦」の詩と解し、現在、概ね支持を得ている。第三説の解釈による「古一」を模擬したのが、陸機である。「陸擬一」（九韻、一韻到底格）は、「悠悠として行き過ぎて遠く、戚戚として憂思深し。此の思ひ亦た何をか思ふ、君が徽（英姿）と音とを思ふ」と詠い始める。「古一」に倣って疊字を用い、また『詩經』王風「黍離」の「行き過ぎて靡靡たり、中心摇摇たり」を踏まえることで、「古十九」の『詩經』淵源を明示する。第五聯では、「遊子は天末に渺かなれば、還期は尋ね可からず」と、明らかに遠行の夫を「君」

（「遊子」と慕う妻の歌として模している。

それでは、韋應物は、「古一」をどのように模したのであろうか。初句「辭君遠行適」の「遠行適」は、右の「陸擬一」に倣っており、ここにも「韋擬」が、「陸擬」をも踏まえていることが看取される。だが「君を辞す」ならば、前述のように、「君」は、故郷に残される者すなわち妻を推定させる。「韋擬」は「陸擬」を反転させて、終始、旅中の夫の立場で詠んでいるのである。読者は、一人の男が、妻を故郷に残したまま、肌を刺すような嚴寒の中、北風に吹かれながら、険しい遠路を行く姿を明瞭に思い浮かべる。⑫「日入不遑息」という時間の導入が、さらにリアリティを掻き立てる。その結果、私小説の主人公と作家との距離が限りなく近いように、男と韋應物とが重なり、読者はその姿に感情移入して、詩人の胸中に思いを馳せる。それに応えるように、⑬⑭は、「古一」第六・七聯に模して、人の世の移ろい易さを吐露するが、最後の聯は、「古一」「陸擬一」とも異なって、韋應物の真情が明確に詠われる。「たとえ君」に知られなくとも、わが心の貞節は揺るぎなく、玉壺の氷のように固く澄み切っている」と。「古一」「陸擬一」の最後は、つぎのとおりである。

「古一」の最後の発話者は、忠臣なのか、妻なのか、今措くとして、「棄捐せられて復た道ふこと勿けん、努力して餐飯を加へよ」と捨てられて、半ば諦めの境地で、「どうぞ御身大事に」と自らに言い聞かせるようにして終わる。「陸擬一」は「去れ去れ 情累を遺て、安らかに処りて清琴を撫せん」と、「遊子」の夫への思いを断ち切るべく、自らに強いて、琴を奏でようとする妻の姿を描く。いずれも相手へのこれまで

の想いを絶つ方向を示す。

それに対して、韋應物の⑩「冰玉徒貞白」は、「古1」「陸擬1」とは逆に、相手の如何に関わりなく、変わらぬ想いを表明する。韋が遠路を行く男に託したのは、いかなる状況にも屈しない不変の貞節だったのである。これは、『文選』注の、行人の「忠節の思い」に、通じていくであろう。先述の陳沆の「離騷」の比喩「美人天末の思ひ、寒修媒老の志」も、それに基づく見解と考えられる。「離騷」では、後半、追放された屈原は、理想の君主を探し求めて彷徨するが、それは、天界に飛翔しての美女探しという虚構を用いて詠われる。陳沆の比喩は、『文選』注に賛同しながらも、「君」は君主を指すという直接的表現ではなく、「離騷」と同様、遠く離れた思い人という設定を借りて、韋應物の忠臣としての貞節を表白したと説いたのである。陳沆は、彼の一途な忠心を証するために、韋應物詩集中の詩句を数首引く。たとえば、「直方 進むを為し難く、此の微賤の班を守る」「坐るに離乱の迹に感じ、永く経済の言を懐ふ」である。前者は、「高陵にて情を書し、三原の盧少府に寄す」（巻二、六韻）の第一聯、後者は、「登高して洛城を望むの作」（巻七、十六韻）の第十三聯である。

「高陵」とは、都長安に属す県名で、韋が二十代初め、肅宗の乾元元年（七五八）頃に得た県尉（県丞の属官）の赴任先、「微賤班」とは、県尉を指す。「直方」という正直方正で、信念を曲げないという自己分析は、約七年後、代宗の永泰元年（七六五）、洛陽の丞の時の作「従子河南の尉の班に示す」（巻二、五古八韻）にも認められる。題下の自注は、宦官魚朝恩配下の神策軍兵士の狼藉に鞭を振って、東都留守（洛陽

の長官）に咎めを受けた事件を記す。韋と同様、「剛直」な性格のいとこの韋班（河南の県尉）に胸中を吐露した作である。冒頭「拙直 余恒に守り、公方 爾の存する所」と詠む。世乱に対する若き韋應物の憤激を物語る逸話である。この事件の後、彼は辞任し、その思いを「洛陽の丞を任じて、告（休暇、ここでは辞職）を請ふ」（巻八、九韻）において吐露する。「方鑿（四角四面な心）は円を受けず、直木は輪と為らず。材を揉るに各々用有り、性に反して苦辛を生ず。」（第一・二聯）と、時勢に合わず苦勞するが、「直木」の性は変えられないと述べる。そして「韋擬11」（四韻）においても、「直道」が認められる。

- ⑤ 冰霜中自結 冰霜 中に自ずから結ばれ
- ⑥ 龍鳳相與吟 龍鳳（琴と笛、阮注参照）相与に吟ず
- ⑦ 絃以明直道 絃は以て直道を明らかにし
- ⑧ 漆以固交深 漆は以て交りの深きを固む

「韋擬11」は、「古18」の模擬詩。「古18」は、「萬餘里」の遠方にいる夫から「一端の綺」を贈り届けられた妻の喜びを詠う。韋もその枠組みを踏襲するが、贈り物は「孤桐の琴」に変えられており、琴の絃に託して、自らの「直道」を喩える。これは、鮑照「代白頭吟」の「直なるは朱絲の繩の如し」を踏まえる（陶注参照）。さすれば前出「代白頭吟」の対句（清如玉壺冰）を踏まえる「韋擬1」の「冰玉徒貞白」と相呼応して、妻の立場を借りた貞節の表明と解されよう。陳沆の説く「韋擬1」の主題を、ここにも看取し得るのである。

だがその堅固な信念は、三十代に入って、揺らぎがみえる。陳沆が挙げた後者の「登高望洛城作」は、永泰元年（七六五）三十一歳のころの作である<sup>21</sup>。韋應物は、代宗の廣徳元年（七六三）冬、洛陽の丞（副長官）として赴任したが、その二年後である。赴任の前年（寶應元年）、約七年に亘る安史の乱が一応、終結したとされるが、それに功あった回紇族が、十月、東都洛陽に入って殺戮略奪の限りを尽くし、「死者萬計、火累旬も滅びず」（『資治通鑑』卷二二二）という惨状を呈した。韋の赴任当時、その荒廢は、未だ回復されていなかった。

韋は高所に立って洛陽を俯瞰し、「高台 雲端に造り、遐かに瞰て四垠周し」と縦横ともに広大な景色を詠い始める。そして乱後当時の傷跡を「膏腴（肥沃な土地）に榛蕪（雑木や雑草）満ち、比屋（立ち並ぶ住居）毀垣空し」（第八聯）と詠む。この風景こそ、陳沆が引いた後者の詩句「坐感亂離迹、永懷經濟言」（第十三聯）の「亂離迹」であり、韋は壮年の官僚として、社会経済の再建を真剣に思索している。それにも拘わらず、最後はこう吐露する。

- 27 吾生自不達 吾が生は自ら達せず  
 28 空鳥何翩翩 空鳥 何ぞ翩翩たる  
 29 天高水流遠 天高く水流遠く  
 30 日晏城郭昏 日晏れて城郭昏し  
 31 徘徊訖旦夕 徘徊して旦夕に訖り  
 32 聊用寫憂煩 聊か用って憂煩を写さん

自らを「空鳥」に喩え、日暮れから闇に沈みゆく街中を、あてもなく「徘徊」する。「貞白」の志をもちながらも、復興の困難さに憂慮する詩人の真情を看取し得る。「徘徊」という不安定な動作が、そのまま彼の志の揺らぎと苦悩を象徴しているのである。「徘徊」は、「韋擬4」にも見える。

「韋擬4」（八韻）は、「古5」（八韻「西北有高樓」）の模擬詩である。「古5」は夫を亡くして悲嘆にくれる妻を高樓内に置き、彼女の奏でる哀しげな調べを「清商 風に随ひて発し、中曲正に徘徊す。一たび弾きて再三歎き、慷慨して余哀有り。歌ふ者の苦しみを惜しまず、但知音の稀なるを傷む」と詠う。「韋擬4」も、この悲歌を奏でるが、

- 11 曲絶碧天高 曲絶えて碧天高く  
 12 餘聲散秋草 余声 秋草に散ず  
 13 徘徊帷中意 徘徊す 帷中の意  
 14 獨夜不堪守 独夜 守るに堪へざらん  
 15 思逐朔風翔 思ひは朔風を逐ひて翔け  
 16 一去千里道 一たび去らん 千里の道

と詠む。なごりの哀韻が「秋草」をもなびかせ、「古5」の妻と同様、女性とはばりを揺がせながら「徘徊」する。詩人は彼女の悲哀に感情移入して、闇夜の孤独は、耐え難いだろうと推し量り、千里の彼方にいる夫の元への飛翔で歌い終える。「古5」は、妻の調べを理解する「知音の稀なるを傷む」（第十四句）と詠むが、張玉穀は、その句を、暗君に

忠言を理解されない「孤臣」の嘆きを託したと解する。それに従えば、「韋擬」も高樓中の女性に自らの思いを託したと解され、「志」の守り難きを吐露しているのではないか。さすれば風に向かって韋が向かおうとする千里の先は、何処であろうか。それを表白するのは、二年前、赴任直後の「廣徳中洛陽の作」(巻六、八韻)である。

- ① 生長太平日 太平の日に生長し  
 ② 不知太平歡 太平の歡を知らず  
 ③ 今還洛陽中 今 洛陽中に還り  
 ④ 感此方苦酸 此れに感じて方に苦酸す

— 中略 —

- ⑨ 時節屢遷斥 時節は 屢々遷斥し  
 ⑩ 山河長鬱盤 山河は 長へに鬱盤たり  
 ⑪ 蕭條孤烟絶 蕭條として孤烟絶え  
 ⑫ 日入空城寒 日入りて 空城寒し  
 ⑬ 塞劣乏高步 塞劣にして高歩乏しく  
 ⑭ 緝遺守微官 緝遺して(残りの民を安心させ) 微官を守る  
 ⑮ 西懷咸陽道 西のかた咸陽の道を懐ひ  
 ⑯ 躑躅心不安 躑躅(ゆきつもとどりつ)して 心安からず

玄宗の「太平」の御代に生まれ育ったがゆえに、洛陽の荒廃が、彼の苦渋をより深める。日が沈み、人氣が絶えたるすら寒い中で、旧都復興の任という重責を双肩に担いながら、己の無力を嘆き惑う詩人の姿が浮

かび上がる。⑭「微官」の任を尽くさねばと自らを鼓舞するが、それに続くのは、親族友人のいる故郷長安(咸陽)への想いであり、波立つ心のまま、当てもなく彷徨する。ここに見える西都長安は、単に故郷だからではなく、玄宗時代への追慕であることは、冒頭①②と呼応させて捉えれば明白である。「韋擬1」に雄々しく詠われた忠臣としての堅固な貞節は、「塞劣」という自己評価の前に揺らぐかのようなのである。寒々しい「空城」を眼前にして任務を全うせねばと思うのは、「太平」の世を知る者なればこそであるが、しかしそれゆえに暗澹たる思いにも駆られ⑯「躑躅」する。憂国の情の源に何があるのか、洛陽時代のこの作から浮上してくる。後述するごとく、揺れ動く心情は「韋擬」にも認められ、当該作は、その主題に大きな示唆を与える。なぜなら当該作は、「古十九」および「陸擬」との関わりが認められるからである。

⑨「時節」が「古7」(「明月皎夜光」)の「時節忽ち復た易はる」を踏まえていることは、すでに拙論第一章第一節で述べたので、贅言は慎む。そして⑯「躑躅」が、「古12」(「東城高且長」)に見える。「古12」は、

- ① 東城高且長 東城 高く且つ長し  
 ② 逶迤自相屬 逶迤として自ら相屬く  
 ③ 迴風動地起 迴風 地を動かして起こり  
 ④ 秋草萋已緑 秋草 萋として已て緑なり  
 ⑤ 四時更變化 四時 更々変化し  
 ⑥ 歲暮一何速 歲暮 一へに何ぞ速やかなる

と「東城」全体の風景から詠い始めた後、第三聯では「古7」と同じく「時節」の推移の速さを詠う。それならば齷齪することなく、「玉のような顔の佳人」と楽しみたいが、彼女の奏でる「清曲」は、「音響 一へに何ぞ悲しき」(第十五句)という調べ。近づこうと思うが、「沈吟して聊か躑躅す」(第十八句)と揺れ動く心境を詠む。各注釈書は「懷才不遇」感を託した作と解している。状況は異なるが、世乱をどうにもしようのない章の「安からざる」心情に通じていくのではあるまいか。「躑躅」は、「陸擬」も4・10・11に用いており、とくに其の四は、「故郷は一へに何ぞ曠かなる、山川は阻しく且つ難し。沈思は万里に鍾り、躑躅して独り吟嘆す」(第三・四聯)と故郷の呉を思っ詠い、「躑躅」する場所は、韋と同じく洛陽(西晋の都)である。韋應物の胸中と、「古十九」、「陸擬」が共振していたと推察されよう。「古12」①「東城」も、馬茂元や曹旭の注は、「洛陽」とする。「古十九」の幾つかは、李善が題下に注するように、後漢の都洛陽を舞台とする。廣徳年間、韋應物が、洛陽を詠むに当たって拠るべき典故として想起したのは、右のように、「古十九」だったのである。

韋應物が「古12」を模したのは、「韋擬8」(十韻)である。

- ① 神州高爽地 神州は高爽の地
- ② 遐瞰靡不通 遐かに瞰れば通ぜざる靡し
- ③ 寒月野無緑 寒月 野に緑無く
- ④ 寥寥天宇空 寥寥として天宇空し
- ⑤ 陰陽不停馭 陰陽 馭を停めず

韋應物 悼亡詩論(承前)

## ⑥ 貞脆各有終 貞脆 各々終わり有り

「神州」とは都を意味するが、東西いずれの都かといえば、「古12」の模擬である以上、東都洛陽である。<sup>23)</sup> 詩人は前掲「登高望洛城」と同じく、高所に立ち、「古12」に倣って洛陽を「遐瞰」し、縦横四方にあまねく通じる広大な広がり詠い始めとする。「登高望洛城」との関わりの深さを物語り、成立年代を示唆するが、次節に譲る。ここで注目すべきは、それに続く洛陽の光景である。寒々しい月光に浮かび上がる緑無き荒野とどこまでも空しい天空の何と寂寥たることか。かつての都の繁栄を想起すれば、時の速やかさを思わざるを得ない。もはや人の世の「貞」も「脆」も意味を失い、時の流れはすべてを呑み込んで去って行ったのではないか。「韋擬1」の「貞白」の揺らぎをここに認めざるを得ないのである。「躑躅」「徘徊」しながら、彼の胸中にきざす思いは、西の方、「咸陽の道」。「朔風」に乗って向かう千里の先は、長安、それも玄宗皇帝時の「太平の世」の長安だったといえよう。

以上のように、「韋擬」の主題は、陳汎説の通り、韋應物の「貞白」の志であろうが、必ずしも十二首に一貫して堅持されているわけではなく、その揺らぎがかいまみえる。揺れ動く憂国の情思の源に何があるのか、模擬詩という虚構のあわいから浮上してくるのは、失われた「太平」の世への追慕である。いわば隠された主題ともいえよう。また「古十九」の舞台が洛陽であるからか、「韋擬」も洛陽との関わりが看取され、洛陽時代のほかの作とのアナロジーも指摘し得る。それは、成立年代と関わってくるので、次節で、さらに考察したい。

## 第二節 「擬古詩」十二首の成立年代

陳沆は、前出作を踏まえて、「韋擬」十二首の成立年代を、韋の「壯少の年」で「丞尉（論者注・洛陽丞、高陵尉を指す）に沈淪し、時に忤ひて合はず、感遇して作るか」と推定する（卷三）。「忤時不合」の「時」とは、洛陽丞時代の事件を含む安史の乱後の荒廢と乱脈を指しているよう。この説も含めて、成立年代を検証する。

成立年代に関する近年の研究は、以下の通りである。孫望の校箋本は、編年による構成であるが、「韋擬」は、年代不明作を集めた卷十に収録されている。その「箋評」では、故郷を離れた「遊子羈旅の篇」が多く、「芳年肆縦の氣概」が表白されているので、一、大曆十年後の早期長安寓居時代か、二、大曆初めの洛陽丞時代という二つの時期を挙げている。鈴木敏雄「韋應物〈擬古詩十二首〉考」も、「いずれも制作年代不詳であるが」、三、「比較的若い頃、それも短期間で作った一連の作かも知れない」、四、「場所は比較的京師（論者注・長安）に近い、それも北方である」と述べる。⑧⑨「いずれも「壯少の年」の作という点は共通しており、論者も賛同する。拙論の見解は、三については同意し、二は、条件付き同意で、一、四については否定する。二の条件付きというのは、以下に証するように、洛陽時代の作詩とは認められても、「洛陽の丞」時代は、足掛け三年に過ぎず確たる資料がない以上、その短期間に成立したとは、断定できないからである。

韋應物詩は現存約六百首が伝えられており、成立年代不明作を含むものの、夙に儲仲君「韋應物詩分期的探討」が、大きく次の三期に分けて

いる。

第一期 洛陽時代（七六三～七七三）

第二期 長安―滁州（安徽省）時代（七七四～七八五）

第三期 江州（江西省）―蘇州（江蘇省）時代（七八五秋～七九〇？）

拙論の結論は、右に述べたように、成立は第一期洛陽時代とするが、その根拠を「古十九」との関わりも含めて以下に立証する。

この第一期は、廣徳元年冬、韋が洛陽の丞として赴任することから始まり、約二年後の永泰元年の作が、前掲の「登高望洛城作」である。先にな後半を掲げたが、前半は、雄大な地形に恵まれた洛陽を高所から俯瞰する。そこには「古十九」および「韋擬」と同一の詩語や類似の表現が認められる。

- |         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| ① 高臺造雲端 | 高台 雲端に造り                           |
| ② 遐瞰周四垠 | 遐かに瞰て 四垠周し                         |
| ③ 雄都定鼎地 | 雄都は 鼎を定むるの地                        |
| ④ 勢據萬國尊 | 勢は 万国の尊に拠る                         |
| ⑤ 河岳出雲雨 | 河岳は 雲雨を出だして                        |
| ⑥ 土圭酌乾坤 | 土圭（日時計）は乾坤を酌る <small>はか</small>    |
| ⑦ 舟通南越貢 | 舟は 南越の貢を通じ                         |
| ⑧ 城背北邙原 | 城は 北邙の原を背にす                        |
| ⑨ 帝宅夾清洛 | 帝宅 清洛を夾み                           |
| ⑩ 丹霞捧朝瞰 | 丹霞 朝瞰（朝日）を捧ぐ <small>ちやうとん</small>  |
| ⑪ 葱龍瑤臺榭 | 葱龍たり 瑤台の榭 <small>そうりゆう うてな</small> |

⑫ 窳窳雙闕門 窳窳たり（奥深いさま） 双闕の門

古くは東周の成王に九鼎を置いて都と定められ、下っては後漢の都としての歴史を誇る洛陽。⑤「河岳」すなわち黄河と五岳信仰の一つ、高山という大河名山に囲まれ、天地は、規則正しい営為を重ねてきた。水運の利は、遠い南国の貢物をも運んだというかつての栄光を述べるのに続いて、墓地として有名な北邙山を詠いこむ。さりげなく南北の方向対を装いながら、濃厚な死の影を漂わせて。ついで山野から川へと転じ、旧都を二つに分けて流れる洛水に「清」を冠して詠む。第十句に、初めで「朝暾」というリアルな時間帯が記され、懐古から登高の現時点に転じたかと思いきや、そうではない。「丹霞」「瑶臺」という神仙的詩語が、天帝の帝都に喩えて、懐古のベールをまとうせている。だが懐古を決定づけるのは、⑫「雙闕門」である。それは、「古<sup>3</sup>」（「青青陵上柏」八韻）の舞台として設定された後漢の都洛陽の中にそびえたつ門である。「古<sup>3</sup>」は、「青青たり陵上の柏、磊磊たり礪中の石」と循環して変わらぬ自然を導入とし、それに対して「人は天地の間に生まれ、忽として遠行の客の如し」（第二聯）と人生短促の嘆きを述べる。その憂さを晴らすべく、「車を駆りて駑馬を策ち、宛（洛陽の南）と洛とに遊戯す」（第四聯）。歛樂追求の行き先が、洛陽なのである。第五聯から洛陽の街並みを以下のように詠う。

- ⑨ 洛中何鬱鬱 洛中 何ぞ鬱鬱たる  
⑩ 冠帶自相索 冠帶 自ら相索む

韋應物 悼亡詩論（承前）

- ⑪ 長衢羅夾巷 長衢 夾巷を羅ね  
⑫ 王侯多第宅 王侯 第宅多し  
⑬ 兩宮遙相望 兩宮 遙かに相望み  
⑭ 雙闕百餘尺 雙闕 百余尺  
⑮ 極宴娛心意 極宴 心意を娛ましめば  
⑯ 戚戚何所迫 戚戚 何ぞ迫る所あらん

冠位束帯をつけた権貴の人々が行き交う大通りには邸宅が立ち並び、遙か南と北の彼方には、宮殿が向かい合うように配され、左右の門の高さは、百尺を超えてそびえたつ。ひたすら都洛陽の豪華な繁栄を描写する。韋應物は、その象徴としての「雙闕の門」を用いて、旧都の、今は亡き繁栄を表現したのである。後半に詠われる乱後の荒廃との落差を意識していることは、言うまでもない。

「古<sup>3</sup>」の模擬詩「韋擬<sup>3</sup>」（八韻）においても同様の景観が詠われるのは当然であるが、それは後半に限られる。「韋擬<sup>3</sup>」は、二度換韻し<sup>28</sup>て、情景も変える。最初の第一・二聯は、「古<sup>3</sup>」をそのまま模して、山川対と人生短促を「世人は自らは悟らず」と詠じて導入とする。換韻後第三聯から引く。

- ⑤ 百金非所重 百金は重んずる所に非ず  
⑥ 厚意良難得 厚意は良に得難し  
⑦ 旨酒親與朋 旨酒 親と朋と  
⑧ 芳年樂京國 芳年 京国を樂しむ

- ⑨ 京城繁華地 京城は繁華の地  
 ⑩ 軒蓋凌晨出 軒蓋 晨を凌いで出づ  
 ⑪ 垂楊十二衢 垂楊 十二の衢  
 ⑫ 隱映金張室 隱映す 金張⑳の室  
 ⑬ 漢宮南北對 漢宮 南北に對し  
 ⑭ 飛觀齊白日 飛觀 白日に齊し  
 ⑮ 游泳屬芳時 游泳 芳時に屬し  
 ⑯ 平生自云畢 平生 自ら云に畢る

第三聯からは、「古<sup>3</sup>」に倣って、ひたすら歡樂追求のさまを詠す。

それは、陳沆の説くように、「百金之贈」<sup>㉑</sup>にふさわしい「良士」のあるべき本分さえも忘れて、「但だ歛娛に耽るのみにして、遂に生平の志事を畢ふるか」という「世人」への批判であろう。だが⑦⑧は、旨い酒も愛する人々とのふれあいも、若い頃（「芳年」）、「京國」長安で十分味わったと詠む。「古<sup>3</sup>」にはない過去の時間と国都長安の導入である。ここにおいて主人公と詩人は、重ならざるを得ない。そして再び換韻の後、第五聯から洛陽の景観が描出される。それは、「古<sup>3</sup>」に倣い、「金張」「漢宮」と後漢を強調した都の繁栄のみを詠う。だが「京國」と「京城」の対比が換韻をも用いて明示され（蟬聯体のバリエーション）、前者が青春時代（「芳年」「芳時」）、「楽」しく「游泳」した地として、詠われれば詠われるほど、後者の繁栄が空しく映ず。最後は、「平生」（昔日）はもはや失われてしまったと吐露するのである。この結末は、「古<sup>3</sup>」とは大いに異なる。「古<sup>3</sup>」は、「極宴して心意を娛ましめば、戚戚 何

ぞ迫る所ぞ」と今の歡樂を肯定する。ここに単なる強がりや自慰など屈折した思いを認めるのも可能かもしれない。だが韋應物は、「古十九」に混在する歡樂追求肯定を詠う詩篇（古4・13・15）は、模擬対象から除外している。当該作においても、現在の洛陽の歡樂ではなく、過去の楽しい時間を前景化して、「韋擬」の隠された主題を如実に物語るのである。過去の時間の前景化、換言すれば、時間の遠近法を用いることによって、「西のかた咸陽の道を懷ふ」と同様、長安への想いを看取し得る。模擬という形式を借りて、詩人の本音を語り、玄宗時代への追慕と喪失感を表現する。「韋擬」は、「古十九」中の現世歡樂の要素をすべて排除し、十二首全篇に亘って悲哀を漂わせる。それは悼亡詩にも通じていき、第三節で詳述する。

以上のように、韋應物は、洛陽への赴任後、洛陽を舞台とする「古十九」の世界を一層身近に感じ、洛陽というトポスの有する過去と現在、繁栄と荒廢の落差の大きさに深い感慨を覚えたに違いない。それは同時に「芳年」の「楽しき」西都長安への想いも深めることとなった。その結果、過去と現在を重層化し、「古十九」を単に典故として詠むだけではなく、その模擬詩を創作するまでに至ったのではないだろうか。拙論が、「韋擬」の成立を洛陽時代とする所以である。

「登高望洛城」には、「韋擬」と共通する詩語が二種、認められる。②「遐瞰」と⑩「丹霞」である。前者は、すでに指摘したように「韋擬8」に、後者は、「韋擬4」に見える。注目すべきは、この二種の詩語を含む詩篇が、すべて洛陽での作なのである。<sup>㉒</sup>しかしながら、この一事を以て、「韋擬」の成立年代を「登高望洛城」と同じ永泰年間と断定するの

は、早計の誇りを免れまい。そもそも洛陽時代は、韋の三十歳代約十年に亘る。この時期を調べると、洛陽ばかりではなく、<sup>(8)</sup>三十年代半ば、大曆四年(七六九)から五年にかけて、揚州に旅行し、その時の作品も質量ともに看過できない。したがって、洛陽時代は、つぎの三期に分けられよう。

- (1) 洛陽前期(おもに洛陽承時代) 廣徳元年(七六三)二十九歳〜大曆四年(七六九)三十五歳頃
- (2) 揚州旅行 大曆四・五年
- (3) 洛陽後期(おもに河南府兵曹參軍と同徳寺閑居時代) 大曆六年(七七二)三十七歳〜大曆八年 三十九歳頃

これまで取り上げた詩篇は、いずれも(1)に属すが、(2)の旅においても、少なからず「古十九」や「韋擬」と同一の詩句や類似の表現が認められる。<sup>(9)</sup>

紙幅の都合で、最も類似性が認められる作だけ挙げれば、広陵(揚州)での「盧庾に寄す」(卷二、七韻)である。

- ① 悠悠遠離別 悠悠として遠く離別す
- ② 分此歡會難 此に分かれて歡會難し

—中略—

- ⑨ 時節異京洛 時節は京洛に異なり
- ⑩ 孟冬天未寒 孟冬 天 未だ寒からず
- ⑪ 廣陵多車馬 廣陵に 車馬多く
- ⑫ 日夕自遊盤 日夕 自ら遊盤す

韋應物 悼亡詩論(承前)

冒頭から、「古8」の「悠悠として山岐を隔つ」(第八句)という二人の間の距離の遠さを表す疊字を踏まえている。それは、「韋擬12」でも「淇水 長く悠悠たり」(第四句)と洛陽から旅立つ者との別離の場所である「淇水」での別れを詠う。疊字の表す果てしなさは、再会の難しさを予期させて一層切ないが、続く「遠離別」は、既出(第三章)「韋擬2」「事無くして久しく離別す」と類似する。第二句以降は、友人盧庾(阮注は『全唐文』卷三七五「梓潼神鼎賦」を盧の作として引くが、未詳。)との楽しい宴が叶わぬことを嘆き、酒に手を出そうとするが、そんな気にもなれない。

⑨⑩の「時節」「孟冬」は、既出(拙論第一章第一節)「古7」の「玉衡は孟冬を指す」(第三句)「時節は忽ち復た易はる」(第六句)の時候の推移を表す詩句を踏まえた一聯になっている。さらに車馬が行き交い、遊興に明け暮れる揚州の活況は、「古3」の「車を駆りて驚馬に策ち、宛と洛に遊戯す」を彷彿とさせる。揚州に旅していても、洛陽のことは常に胸中から去らず、それゆえ「古十九」を踏まえた表現になり、ひいては「韋擬」とも関わることになったのであろう。足かけ二年のこの旅行中の作も、少なからず「古十九」「韋擬」との関わりを看取し得るのである。

次に(3)に属す作品の中にも、「古十九」や「韋擬」と関わる詩篇が少なくない。たとえば、「雍聿の潞州に之きて李中丞に謁するを餞す」(卷四、八韻)は、「鬱鬱兩相遇、出門草青青」と詠い始めるが、既出(第三章)の通り、「古2」の疊字を踏まえて、別離を余すところなく表現する。雍聿なる人物の洛陽から潞州(山西省)への旅の目的は、李中丞<sup>(10)</sup>

との謁見であるが、韋は李のことを「主人は才且つ賢、士を重んじて百金輕し」と称賛して、雍を励ます。「韋擬3」の「百金非所重」（第五句）を用いており、二作の親近性を明示する。(3)は、足かけ三年と短期であるにもかかわらず、この時期の作品の多くに、「古十九」「韋擬」と同一の詩句や類似の表現を看取し得るのである。<sup>(36)</sup>

このような傾向がもっとも顕著に認められる作が、「同徳寺閣に集眺す」（卷七、十韻、「同徳1」と略称す）である。

- |         |    |          |
|---------|----|----------|
| ① 芳節欲云晏 | 芳節 | 云に晏れんと欲し |
| ② 遊遊樂相從 | 遊遊 | 樂しみて相從ふ  |
| ③ 高閣照丹霞 | 高閣 | 丹霞に照り    |
| ④ 颺颺含遠風 | 颺颺 | として遠風を含む |
| ⑤ 寂寥氛氳廓 | 寂寥 | として氛氳 廓く |
| ⑥ 超忽神慮空 | 超忽 | として神慮 空し |
| ⑦ 旭日霽皇州 | 旭日 | 皇州に霽れ    |
| ⑧ 岧峩見兩宮 | 岧峩 | として兩宮を見る |
- 中略——
- |         |    |         |
|---------|----|---------|
| ⑬ 陰陽降大和 | 陰陽 | 大和を降し   |
| ⑭ 宇宙得其中 | 宇宙 | 其の中を得たり |
| ⑮ 舟車滿川陸 | 舟車 | 川陸に滿ち   |
| ⑯ 四國靡不通 | 四國 | 通ぜざる靡し  |

韋應物は、揚州旅行の後、大曆六年、洛陽で河南府兵曹參軍（軍隊の

武器、軍防、烽候などを管理）を任じたが、二年後、病によって辞職して、同徳寺で養生した。同徳寺は、洛陽の東城、景行坊にある寺院で、その名に因む作が、右の詩も含めて七首残されている。<sup>(37)</sup>それらによると、寺は、「山水は心の娛しむ所」（「同徳6」）という山水に囲まれ、「喬木」（「同徳3」）が林立し、月光に照らされて銀色に輝く広い庭（「広庭に華月流れ」「同徳2」）があり、そこにそびえたつ「高閣」（「同徳1・2・5」）である。寺での療養生活は、彼にとって、心身回復に絶好の環境であったことが伝わってくる。以後の韋の人生の特徴ともいふべき、たびたびの閑居先が仏寺であることの原点といえよう。ただ右の詩は、「芳節」（仏寺であるから仏教的節会か）に、朋輩と連れ立って「遊遊」のため訪れた時の作で、おそらく兵曹參軍時代であろう。

ここで指摘すべきは、「韋擬」との濃密な関係である。「高閣」は、③「丹霞」に照り映えて輝かんばかりで、その上の晴れた空には、⑦「旭日」が浮かんでいる。この「旭日」と「丹霞」との組み合わせは、前出「丹霞 朝暾を捧ぐ」（「登高望洛陽」）を連想させて、洛陽との関わりを物語るが、「韋擬4」にも見出せる。「韋擬4」は、前掲の如く、「古5」（「西北有高樓」）の模擬詩。「古5」は夫を亡くして悲嘆にくれる妻を西北の高樓内に置き、冒頭の二聯は、高樓の外観を詠う。<sup>(38)</sup>それを模したのが、つぎの冒頭の四句である。

- |         |    |                 |
|---------|----|-----------------|
| ① 綺樓何氛氳 | 綺樓 | 何ぞ氛氳たる（気の盛んなさま） |
| ② 朝日正杲杲 | 朝日 | 正に杲杲たり          |
| ③ 四壁含清風 | 四壁 | 清風を含み           |

## ④ 丹霞射其牖 丹霞 其の牖(れんじ窓)を射る

「古5」には無い「朝日」という時間と光が描かれ、「丹霞」によって色彩も付加されて、あでやかな高樓を浮かび上がらせる。さらに同徳寺の高閣は、遠方からの風を「含み」、「氛氳」たる気も開放されていくが、「韋擬4」の綺樓の四壁にも、韋の好む「清風」がさわやかに吹きわたる。「同徳1」は、「韋擬4」との関わりを想起せざるを得ないのである。

このほか、「同徳1」の⑧「兩宮」は、既出「韋擬3」(「漢宮南北對」)で、描かれている。後半の⑬「陰陽」は、「宇宙」の対語として、寺をも含む洛陽を取り巻く森羅万象の時空を意味し、周囲四方の国々すべてが「通せざる靡し」と壮大に詠われる。これも「韋擬8」(「神州高爽地、遐瞰靡不通」)と重なっていき、「韋擬」と同時に詠まれたかの錯覚すら起こる。

同徳寺に因む他の詩篇にも、「韋擬」と同様の詩句や描写を少なからず認め得る。例示すれば、「逍遙す東城の隅、双樹寒く葱蒨たり。広庭に華月流れ、高閣余霞擬る」(「同徳2」、第一・二聯)。「東城」は、前出「古12」。「東城高且長」に見え、広い庭を銀色に浮かび上がらせる。「華月」は、「韋擬10」に「華月 屢々円欠す」と詠まれている。「華月」は、さらに「同徳3」においても、印象的に詠われている。「同徳3」は、雨上りの寺の情景を詠っているが、韋應物がその興趣を心ゆくまで観照する思いが伝わってくる。

## ① 川上風雨來 川上風雨來り

韋應物 悼亡詩論(承前)

② 須臾滿城關 須臾に城關に滿つ

③ 岿堯青蓮界 岿堯たり 青蓮界(仏寺)

④ 蕭條孤興發 蕭條として孤興發す

⑤ 前山遽已淨 前山遽かに已だ淨く

⑥ 陰靄夜來歇 陰靄 夜來歇む

⑦ 喬木生夏涼 喬木 夏涼を生じ

⑧ 流雲吐華月 流雲 華月を吐く<sup>38)</sup>

雨後の瑞々しい緑の中、風のさやぎまで静寂を生み出して、まさに韋應物詩特有の「清」「幽」の世界が広がっている。この⑦「喬木生夏涼」と殆ど同一の詩句から始まる作が、「盧嵩の秋夜に五韻を寄せらるるに酬ゆ」(卷五、五韻)である。

① 喬木生夜涼 喬木 夜涼を生じ

② 月華滿前墀 月華 前墀(前庭)に滿つ

③ 去君咫尺地 君を去ること 咫尺の地

④ 勞君千里思 君を勞す 千里の思ひ

⑤ 素秉棲遁志 素より秉る 棲遁の志

⑥ 沉貽招隱詩 沉んや 招隱詩を貽るをや

⑦ 坐見林木榮 坐ろに見る 林木の榮

⑧ 願赴滄洲期 滄洲に赴きて期するを願ふ

⑨ 何能待歲晏 何ぞ能く歲晏を待たん

⑩ 攜手當此時 手を携へて 此の時に当たらん

詩末の原注に「盧詩に云ふ、歳晏以て期と為す」とあり、盧嵩との応酬詩である。盧詩は未見であるが、「棲遁志」「招隠詩」「滄洲（仙人や隠者の住む所）に赴く」という詩句から明らかなように、隱遁志向を共有して交わされている。盧嵩は、永泰年間洛陽の丞の時の同僚のようで、それゆえか、陶注は、「永泰元年秋の作」とする<sup>40</sup>。だが第一聯の情景描写は、まぎれもなく同徳寺のそれであり、成立は、同徳寺閑居の時と考えるべきではないか。それを証するように、当該作も、「草擬」との関わりを看取し得るのである。④「千里思」は、「草擬4」「一たび去ら千里の道を」（第十六句）、「林木榮」は、「草擬9」「春至りて 林木変ず」（第一句）と。かように同徳寺に因む作と「草擬」との関わりの深さが認められるのである。

これまで洛陽時代の諸作が、「古詩」および「草擬」と関わりのあることを指摘して、「草擬」の成立時期は、第一期洛陽時代であることを、立証してきた。それらは、(1)(2)(3)いずれの時期においても一貫して認められたが、(3)の同徳寺に因む詩篇が、殊に「草擬」と、より深く関わっていることを看取した。韋應物は、洛陽の丞の赴任によって、洛陽を舞台とする「古十九」の世界に親近感を抱き、それを典故とする詩作を試みたが、(1)の時期においては、模擬詩を作るまでの機はまだ熟していなかったのではないか。現実の荒廢の深刻さが、模擬詩創作に必要な客観性と余裕を与えなかったともいえよう。続く(2)の揚州滞在期においても、旅という「離情」を実感する中で、「古十九」を踏まえた詩篇を重ねて綴った。それによってさらに「古十九」に近づき、模擬詩創作の意欲が芽生え、旅の後、(3)の洛陽後期時代に「草擬」十二首が生まれたのでは

ないだろうか。確たる証拠はないので断定し得ないが、その蓋然性は高いといえよう。

### 第三節 悼亡詩との関わり

「草擬十二」の主題および成立年代を考察した結果、三十代の韋應物が、安史の乱後の洛陽において、「太平の世」再興の使命感に駆られ、「貞白」を己に課して、自らを鼓舞する姿が浮かび上がってきた。同時に、時として荒廢の深刻さに翻弄されて苦悩し、心身ともに衰弱しては、自身の存在を確認するかのようになり、詩作を綴っている。「躑躅」「徘徊」しながら、自らの苦悩を客観視する中で、彼の拠り所になったのは、玄宗の「太平の世」であった。その喪失の深さが、「離情」を詠う「古十九」への共感を生み出したといえよう。「古十九」は、今と昔、「各在天一涯」という、時間的空間的隔絶への嘆きを表白しているからである。だが「草擬十二」は、十九首のうち、歡樂追求を詠じた詩篇を模擬対象から除外し、全篇に哀嘆の調べを奏でている。それはまさに妻との死別を哀しむ「悼亡詩」と相通じていく。韋の妻元蘋は、安史の乱の渦中（天宝十五載八月）に婚姻し、乱後、韋應物と常に「手を携へて」歩みを共にしてきた。彼の使命感とそれゆえの葛藤を、彼女ほど理解し得た存在は、なかったであろう。その妻を亡くした喪失感の深刻さが、「草擬十二」と「草悼」の類似性を、際立たせたものではあるまいか。「草擬十二」の成立時期が洛陽後期（大暦六年～大暦八年）という第二節の結論が正しければ（あるいは、概括的に洛陽時代とするにしても）、大暦十年九月に亡くなった妻を悼む「草悼」の繫年は、全首、「草擬十二」

の後に位置する。その先後をも勘案しながら、一、時間表現、二、空間表現、三、悲哀表現の三つの観点に拠って両者の関わりを考察する。

悼亡詩における時間表現には、現時点を表す微視的表現と、推移を表す巨視的表現の二種類が認められた。前者は具体的には、季節表現や昼夜の時間帯である。

悼亡詩の季節表現は、「潘詩」以来、構成の基軸となり、「韋悼十九」もそれに基づいて再編成されたことを既述したように（第一稿）、重要なモチーフである。「韋擬」においても、それは不可欠の要素になっており、「陸擬」と比較すれば、その傾向は明白である。「韋擬十二」が、「其の十一」以外のすべてに季節表現が認められるのに対して、「陸擬十二」においては、七首にしか詠われない。「韋擬」に季節表現の比重が高いことは、「韋悼」との類似性の一因になっていると考えられる。と

くに宋玉「九辯」以来の「悲秋」の伝統である秋と冬の描写は、「離情」や「哀傷」を表現するのにふさわしい。たとえば、前掲「韋擬1」「驅車背郷園、朔風卷行迹。嚴冬霜斷肌、日入不遑息」は、故郷を後にして北風に煽られながら、肌刺す寒さに耐えがたい思いで歩む男の姿を詠む。それは、妻亡き後、服喪の白い帳（素帷）を掲げた部屋を後にして、厳寒の中、公務に出かけざるを得ない詩人の姿に重なっている。「晨に起きて嚴霜を凌ぎ、慟哭して素帷に臨む」「飄風忽ち野を截り、嘹唳雁起ちて飛ぶ」（「韋悼2」「往富平傷懷」第一・九聯）と。また「朔風」は、前掲の綺楼中の女性を詠う秋の歌（「韋擬4」）にも見える。綺楼から流れ漂う歌曲の余韻は、秋草の上に散り広がり（⑫「餘聲散秋草」）、吹きつける北風を追いかけて千里の彼方の思い人のところに飛んで行き

たい（⑮⑯「思逐朔風翔、一去千里道」と詠む。この風は、悼亡詩中、「霜露 已に淒漫たり」という底冷えのする秋の深夜、哀しみに打ちひしがれて眠れぬ詩人にも吹き付ける。「朔風 中夜に起こる」（「韋悼17」「秋夜」③）と。

時間の推移やその速やかさを表す巨視的時間表現も認められる。「韋擬3」では、「世人不自悟、馳謝如驚颺」と、時間が「驚颺の如く」去って行くのを世の人は悟らないと詠む。「韋悼14」「閑齋對雨」でも、詩人は高い木々に囲まれた人気ない書齋の中で、そぼ降る雨を見つめながら、「端居 往事を念ひ、倏忽たること驚颺の若し」と、来し方を思っ

て感慨に耽る。また第二稿で論じたように、「韋悼」の特質であるノスタルジックな過去の時間表現も、「韋擬」にすでに看取される。「韋擬3」「遊泳屬芳時、平生自云畢」と。「芳時」は、「芳」という美称によって、よき過去を表し、それは悪しき現在との対比を含んでいる。その対比はノスタルジー成立の必要条件であり、もはや失われてしまった「平生」への追慕を表現する。「平生」は、「韋擬9」にも「良人久燕趙、新愛移平生」と詠まれ、夫の愛が、美人の多い「燕趙」の誰かに移ったのではないかと妻が悩む。かつての自分への愛を「平生」に籠め、「新愛」と対比させている。悼亡詩では、4「冬夜」に認められる。「平生恩重しと雖も、遷去して窮埃に托す」と、妻の生時の深い情愛が、今や窮泉の靄の彼方に消えてしまったことを嘆く。16「秋夜」も、一人、冷たい雨垂れの音を聞きながら（「夜聞寒雨滴」）、「惆悵たり平生の懷ひ」と昔日の思い出を哀しく反芻し、眠れぬ夜を過している。「韋悼24」（卷十六、八韻）は、

貞元二年（七八六）、江州刺史としての巡察の時、春霞にけふる青山や泉谷を見て、新婚時を過ごした「驪山の居」を思い出し、「昔年を追懐」した作である。<sup>(45)</sup>

- ⑨ 荏苒斑鬢及 荏苒<sup>じんぜん</sup>として斑鬢に及び  
 ⑩ 夢寢婚宦初 夢寢 婚宦の初め  
 ⑪ 不覺平生事 覺えず 平生の事  
 ⑫ 咄嗟二紀餘 咄嗟の二紀（一紀は十二年）の余  
 ⑬ 存歿闊已永 存没 闊として已に永く  
 ⑭ 悲多歡自疏 悲しみ多く歡び自ら疏なり

今や白髪まじりの頭になり、二十年以上前になる新婚時代や出仕初めの頃は、もう夢のように思うと詠んだ後、今は悲しみばかり多いと吐露する。生と死（「存歿」）の世界は遠く隔たり、「平生」は「歡び」の多かった妻の生時を意味しているのである。<sup>(46)</sup>

時間表現に関する「韋擬」「韋悼」両者の類似性は、右の如く明白であるが、同一の詩語を用いながらも、「韋悼」の方が、詩人の悲傷の思いが、切実に伝わってくる。これは、当然のことながら、詩作のパトスが、現実の悲愴に基づき、格段に深刻であることに起因しているよう。しかしながら、先に「韋擬」を創作し、虚構の中で同様の悲哀を自由に表現し得たことが、「韋悼」に何らかの影響を及ぼしていると考えられな

いだろうか。

次に、二、空間表現について比較する。両者ともに、大小、広狭、長

短さまざまな空間や景観が描出されているが、「韋擬1」において、最初に詠われる道の長さが印象的である。それは無論、「古1」「行行重行行」のはてしなく伸びていく道のイメージが基層にあるが、①「君を辞して遠く行き適く」③「すでに謂ふ 道里遠しと」によって、さらに重ねられる。この道の遠さは、二人の距離の隔絶感になる。「庭中 奇樹有り」（古9）を模した「韋擬5」では、女は雲の果てに在る「君子」に美しい花を届けたいと思うが、遠くて叶わないと嘆く。「君子は賞つるに在らざれば、之（嘉樹の靡蕪の花）を雲路の長きに寄す。路長くして信に越え難く、此の芳時の歌くるを惜しむ」（第二・三聯）と。一方、「韋悼2」は、前掲の如く、詩人は嚴寒をつけて、公務のために出張するが、「單車 路 蕭條たり、首を回らせば長く逶遲たり」と詠う。状況も詠み手の性も異なるが、はてしなく伸びる道の光景を同じくする。

「韋擬」「韋悼」両者に共通する比較的小さい空間は、「閨」「房」である。「韋擬12」では、「白日淇上没、空閨生遠愁」と詠う。洛陽から船旅で出発する淇水のほとりは薄暮に包まれ、一人残された女（孤妾）は、ガランとした人気がない部屋で、いつまでも愁いに沈んでいる。一方、「韋悼12」「端居感懷」でも、詩人は終日、一人無言のまま（「永日独り言無し」）、服喪の帳を垂れた部屋（「帷室」）に座していると、「空房」云に暮れんと欲すと、夕闇が人気がない部屋を包んでゆく。主人公の性は異なるものの、同様の空間が描写されている。さすれば拙論其の1の末尾で指摘したように、韋應物が、「古16」「長門賦」「寡婦賦」という詠み手が女性と設定された作品を積極的に擬して、詠む主体を詩人自身に変換させて悼亡詩を綴る手法をここでも見出せよう。この「空房」以

外にも、悼亡詩では、「空齋 高樹に対す」（「韋悼14」）や、「歳晏 空宇を仰ぐ」（「韋悼17」）など、建物や部屋に「空」を冠して妻の不在を表し、詩人の孤独な状況を物語る。先行する「韋擬12」との関わりを看取り得るのである。

また「韋擬12」は、春の季節を背景として、「淇水 長く悠悠たり、芳樹 正に妍鬱たり」と詠む。果てしなく流れる川と、岸辺に連なり香しく咲き乱れる花々を描く。この句を皮切りに、以下に「古十九」↓「韋擬」↓「韋悼」の緊密な関わりを、例示しよう。この「悠悠」は、「古11」の、春風が「百草」を揺るがす「長き道」を表す疊字（「悠悠渡長道」）を模している。水辺に連なる「芳樹」は、「韋悼7」「芳樹」対す「に」に「迢迢たり芳園の樹、列なりて清池の曲に映ず」と澄んだ池の周囲に植えられており、その景観が目に浮かぶようである。「迢迢」は、「古10」「迢迢たり牽牛星」と見え、「韋擬11」にも「天の一方」にいる夫から「琴」を送られてきたことを詠い、「迢迢として万里隔たる」とその遠方を強調している。この隔絶感は、「古1」の「相去ること万余里」、各々天の一涯に在り」に基づく。煩を厭わず、連鎖的に列挙したが、「古十九」↓「韋擬」↓「韋悼」の緊密な関わりが明らかであろう。

空間的隔絶感は、「千里」も用いられている。前掲「韋擬4」の「綺樓」中の女性が、思い人に通じる道を「千里道」と詠んだ以外に、「韋擬6」にも見える。官吏として浮沈を分かち、疎遠になった友情という「古7」（第一章第二節）に模した嘆きを、満月の秋の夜に詠う。

① 月滿秋夜長 月満ちて秋夜長く

韋應物 悼亡詩論（承前）

- ② 驚鳥號北林 驚鳥北林に号ぶ  
 ③ 天河橫未落 天河 横たはりて未だ落ちず  
 ④ 斗柄當西南 斗柄 西南に当たる

— 中略 —

- ⑦ 商飆一夕至 商飆（秋風）一夕至り  
 ⑧ 獨宿懷重衾 独宿 重衾を懷ぶ  
 ⑨ 舊交日千里 旧交 日々に千里  
 ⑩ 隔我浮與沈 我を浮と沈に隔つ  
 ⑪ 人生豈草木 人生 豈に草木ならんや  
 ⑫ 寒暑移此心 寒暑 此の心を移す

秋の夜長に鬱屈した思いを抱えて、眠れぬ夜を過ごす人物の耳に、突如、北林から響く「驚鳥」の叫び。それに誘われるように、視線は天空に移り、「天河」「斗柄」によって、夜明けのさまを描出する。空間が一気に夜空にまで広がるのは、「韋擬6」が、「古7」（「明月皎夜光」）の模擬詩だからであろう。ただ興味深いのは、同じく「千里」を用いている「韋悼17」「秋夜」の類似性である。

- ① 霜露已凄漫 霜露 已に凄漫たり  
 ② 星漢復昭回 星漢 復た昭回す  
 ③ 朔風中夜起 朔風 中夜に起こり  
 ④ 驚鴻千里來 驚鴻 千里より来る  
 ⑤ 蕭條涼葉下 蕭條として涼葉下り

- ⑥ 寂寞清砧哀 寂寞として清砧哀し  
 ⑦ 歳晏仰空宇 歳晏 空宇を仰ぎ  
 ⑧ 心事若寒灰 心事 寒灰の若し

大地に広がる「霜露」の冷涼感と光は、天空の「星漢」と相呼応して季節感を表すとともに、巨大な空間を現出させる。そこに真夜中、「朔風」が吹き起ると、それに乗ってくるかのようになり、「千里」の彼方から「驚鴻」が飛来する。この鳥は、「韋悼4」「冬夜」にも見え、阮注に拠って亡妻の比喻と解し、「古十九」との親近性を指摘した(第三章)。

ここでも詩人は、去って行った妻の化身が、千里の彼方から飛来したのではと、願望を込めて詠ったのであろう。一方、「韋擬6」では、「驚鳥」が登場し、似て非なる鳥といふべきであるが、ここに②「驚鳥號北林」の典故として、魏・阮籍「詠懷詩」其の一を想起すれば、「韋擬6」と「韋悼17」は、明らかに結びつく。「孤鴻 外野に号び、朔鳥 北林に鳴く」によって。アナグラムのように改変しながらも、両首とも統一感のある「秋夜」の寂寥を聴覚的視覚的に訴える。最後はともに、「草木」ならざる人間ゆえに、揺れ動き、時には、燃え尽き冷え切った灰のようにもなる「心」に帰趨していくのである。両者の近似性と、「韋悼」の一層の深哀が看取されよう。

次いで、三、悲哀表現についてである。「古十九」は悲哀を基調としながらも、既述した如く、中に刹那的快樂を詠う篇が混在している。それらの世俗的歡樂のみに終始する「古4・13」などは、「韋擬」十二首の模擬対象から除外されており、十二首すべてに何らかの悲哀表現が見

出される。それが、悼亡詩との類似性の最大要因であることは、明白である。たとえば「寒蛩 洞房に悲しみ、好鳥 遺音無し」(「韋擬6」)、「孤影 中 自ら惻み、双涕の零つるを知らず」(「韋擬9」)など、「孤」「獨」「悲」「涙」という「古十九」にも多用される典型的詩語や、物象・心象風景は、枚挙に遑なく、逐一列挙しない。孤独感に通じていく「單」だけを挙げる。現行「古十九」には見えない詩語で、「古十九」を介せず「韋擬」「韋悼」両者の関わりを認め得るからである。「春至りて林木変じ、洞房夕べに清を含む。單居誰か能く裁かん、好鳥 我に對して鳴く」(「韋擬9」)と夫の不在を「單居」で表す。これは、悼亡詩では「傷逝」において、「單居して 時節移り、泣涕して嬰孩を撫す」と見える。これも詠み手の性が変換されての詩語である。このほか、27「秋夜」で「秋斎 寢席單なり」と妻の喪失を嘆く。28「對雜花」の「單棲 遠郡を守る」は、滁州・江州・蘇州のいずれかは特定できないが、妻亡き後、刺史への單身赴任を意味している。32「冬至夜」でも「邃幕 空宇に沈み、孤燭 牀の單なるを照らす」と韋應物独特のおぼろな陰影を描出し、「孤」と呼応して、孤独感が強調されている。

さらに強い悲哀感の表白は、「恨」を用いていることである。前掲「韋擬1」冒頭に、「辭君遠行邁、飲此長恨端」と詠む。第三稿の南朝齊梁・江淹との関わりで述べたように、「僕は本より恨人なり」(「恨賦」)と詠む江淹詩を連想させ、それが基層として、波動を及ぼしている。「綺樓」中の女性の歌曲に「但だ離恨の情を感じるのみ」とも詠む(「韋擬4」)。そして、夫が美人の多い「燕趙」に行ったままで、取り残された妻の孤独を詠う「韋擬9」では、「別時の雙鴛の綺は、此の千恨の情

を留む」と「千恨」を用いて大仰に嘆く。この表現は、悼亡詩では、前掲「韋悼<sup>2</sup>」において、公務への道を歩きながら「恨を銜みて已に酸骨、何ぞ況んや苦寒の時をや」と骨身にまで染み入る「恨情」を吐露する。また6「除日」でも「忽ち驚く年の復た新なるを、独り恨む 人の故と成るを」と詠み、時間の「新」と人間の「故」の対比を前に、慄然と立ちすくむ詩人の心情が「獨恨」によって表されている。さらに21「四禪精舎登覽、悲舊、寄朝宗巨川兄弟」にも見える。この詩も精舎を再訪し、妻の兄弟に悲哀を訴えている。春風にそよ吹かれながら（「春風日已に喧かなり」）、川のほとりに広がる「百草」や「雜花」を楽しみつつ、詩人は過去の世界に入って行く。

- ⑨ 徂歲方緬邈 徂歲 方に緬邈たるも  
 ⑩ 陳事尚縱橫 陳事 尚ほ縱橫たり  
 ⑪ 溫泉有佳氣 溫泉 佳氣有り  
 ⑫ 馳道指京城 馳道（天子や貴人の通る道）京城を指す  
 ⑬ 攜手思故日 手を携へて 故日进行思ひ  
 ⑭ 山河留恨情 山河 恨情を留む  
 ⑮ 存者邈難見 存する者は邈かに見ひ難く  
 ⑯ 去者已冥冥 去る者は已に冥冥たり  
 ⑰ 臨風一長慟 風に臨んで一たび長慟す  
 ⑱ 誰畏行路驚 誰か畏れん 行路に驚くを

この⑭「恨情」は、「山河」までもがそれを含んでいると、自然を擬

人化して強烈な悲愴を伝えてくる。「山河」が「故日」のままに存在していることが、擬人化表現を生み出したと考えられるが、その「故日」とは、具体的には⑩⑫で詠われている。湯気立ちのほり、哀傷とは程遠い温泉の景観である。だがもはやそれに違和感を感じる必要はない。それは、右千牛として身近に仕えた玄宗の温泉宮（驪山の華清宮）であり、新婚時、乱を避けて妻と暮らした土地だったのだから。ここに韋應物悼亡詩のバトスとしての二つの喪失を再確認できよう。その「恨情」を山河は黙って見守っているのである。

最後に再び風に吹かれるが、この風は、先の暖かい春風とは異なる。江淹「悼室人」の風が、時空を超えて吹いてきたのである。「暖然として時將に暮れんとし、風に臨んで故居に返らん」と。神女と化して、黄金輝く水辺や碧玉の山間に遊ぶ（奄映金淵側、右遊豫碧山隅）亡き妻への帰宅の呼びかけである。十首最後の末句という江淹悼亡詩の掉尾を飾る詩句を用いて、「恨情」と呼応させている。韋應物は、その風をまともに受けて、人目も憚らず慟哭するのである。ここに哀傷の調べが江淹詩と重なり、いわば二重奏になって響くのが聞こえてくるだろう。模擬という修辭が、それを可能にしたといえよう。

以上のように、「韋擬」と「韋悼」の親近性を中心に、その関わりを指摘した。同一の詩語や詩句、類似の表現を看取し得たが、「韋悼」の悲傷感の方が、より痛切なのは、宜無きことである。それは、現実と虚構の相違でもあろう。模擬詩における悲哀表現は、虚構に托して自己の感慨を表し、間接的にならざるを得ない。だが、主人公を女性に措定するなど、「模擬」という隠れ蓑を用いることによって、当時の士大夫と

しての名分という文化の呪縛や詩人自身の矜持という外在的内在的拘束から解放され、章自身の真情をより自由に表現し得たのではあるまいか。その真情とは、玄宗の「太平の世」が失われた深い喪失感であった。それを理解した妻の逝去という個人的喪失感という二重の喪失が、「章擬」と「章悼」両者の類似性の根幹に存したといえよう。第二節で考察した如く、「章擬」の成立は洛陽時代であり、踏み込んでいえば、大暦六八年の後期と考えられる。数年後に死去した妻を悼む詩篇は、模擬詩創作によって獲得された自由な詩興が下支えとして初めて発露し得たのではないだろうか。

それを現実的に明示するのが、同徳寺というトポスである。「同徳寺閣集眺」を初めとして、同寺における諸篇と「章擬」との関わりの深さを既述したが、悼亡詩においても19「同徳精舍舊居傷懷」が詠まれ、1「傷逝」の題下注には「此後嘆逝哀傷十九首、盡同徳精舍舊居傷懷時所作」と記される。この二十一字は、「十九首は〈てんてい尽く〉同徳精舍の旧居での作」と読める。だが陶敏注の指摘する如く、同徳精舍での作は19のみで、その他の作は、大暦十一年（七七六）九月の妻の逝去後から建中初（七八〇）の灑上の善福精舍閑居時の作である。これを如何に解すべきか。孫望氏は、各種版本を調査し、元刊本・注本には記されていないことを指摘し、それは自注ではなく、後人の手による可能性を説く。その上で「尽」は、「同徳精舍舊居傷懷」にてんてい「尽く」と訓むべきで、19が悼亡詩最後に位置することを意味し、「時所作」は衍字とする。今、底本十巻の題下注すべてを元刊本の題下注と照合調査すると、ほかの注はすべて元刊本に認められながら、当該注のみ見えない。それゆえ孫氏の

説くように、後人の手になる蓋然性が高いと考えざるを得ない。今となつては、誰がいつ挿入したのか確定し得ないが、後人は、なぜかような疑義を招く注を付したのであろうか。拙論の如上の考察を踏まえれば、おそらく後人も、章應物が初めて赴任した洛陽という地、その象徴としての同徳寺への彼の特別な思い入れを感じたからではあるまいか。そこには、妻元蘋とともに歩んだ安史の乱後の時間が凝縮していたといえよう。19「同徳精舍舊居傷懷」をつぎに掲げる。

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| ① 洛京十載別 | 洛京 十載の別れ                     |
| ② 東林訪舊扉 | 東林 旧扉を訪ふ                     |
| ③ 山河不可望 | 山河 望む可からず                    |
| ④ 存歿意多違 | 存没 意 違ふこと多し                  |
| ⑤ 時遷跡尚在 | 時遷るも 跡尚ほ在り                   |
| ⑥ 同去獨來歸 | 同に去りて独り来り歸る                  |
| ⑦ 還見窓中鴿 | 還 <small>ま</small> 見た見る 窓中の鴿 |
| ⑧ 日暮遶庭飛 | 日暮れて 庭を遶りて飛ぶ                 |

陶敏注に拠れば、建中三年（七八三）、章が滁州刺史に赴任する途次、洛陽を経由した時の作という。大暦八年（七七三）、同徳寺で療養後、長安に帰ったので、丁度十年ぶりの旧居再訪であった。第二聯では、洛陽の詩で必ず詠まれた嵩山・洛水など名山大河を眺めることは辛くてできないと切なく詠む。変わらぬ自然に対して、人の世は、生と死、世界を異にせざるを得なくなってしまうから。この自然と人間との対比は、

そのまま第三聯で反復されるとともに、時間の推移が強調され、過去と現在の致命的な相違が、「同去獨來歸」と簡潔に詠われる。だがその詩句から、長安と洛陽を結ぶ一本の道が鮮やかに浮かび上がり、十年前、洛陽を去る二人の後ろ姿と今、ただ一人洛陽に向かってくる詩人の姿が見えてくる。すなわち空間的「去來」と、今昔の時間的往還が重ねられているのである。韋應物悼亡詩の特質である空間移動を伴う今昔の往還が、ここに明確に認められよう。それを最も象徴的に物語るトポスは、同徳寺をおいてほかにはないのである。そして同寺は、「擬古詩」から「悼亡詩」へという両者の接点を明示するといえよう。暮色に染まる高樹に囲まれた広い庭を、何かを探し求めるようにして飛びめぐる白い鴿は、妻の魂の化身だったのでないだろうか<sup>④</sup>。

### おわりに

「韋悼」と「古十九」との関わりについて、韋應物詩の模擬性を観点として考察した。その結果、「古十九」の淵源とされる『詩經』を原拠とする詩語が「古十九」を媒介させることで意味を交換させ（第一章）、また「古十九」を原拠とする詩句や表現が潘岳哀傷作品の波動を受容して踏襲されるという重層性、「古十九」と関連の深い「長門賦」や「陸擬」の詩句をも襲用するという複合性（第二章）が認められた。この模擬性の特質は、「韋悼」の質量ともに突出した出現の遠因とみなせよう。しかしながらそれは、胡旭『悼亡詩史』『韋應物・斯人既已矣』が、「韋悼」の「微瑕」として前人の作を踏襲しすぎると批判するように、五言

という限定された詩句の中では、韋應物の独自性の希薄さに繋がる恐れもある。正に「古人の陳言を取り、一一にして之を摹倣し、是れを以て詩と為すは、可ならんや<sup>⑤</sup>」である。だが一見、「古十九」やそのほかの諸作の単なる踏襲のように見えながら、精査すれば、諸作の光彩が相互に映発し増幅して、彼独自の息吹を見出し得た。さらに詠む主体の性差を交換することや、潘岳詩を反転した試み、「古2」の暈字の忌避と〈今〉の背景の〈昔〉への転換（第三章）など、「韋悼」における「古十九」の襲用からは、反転性というべき特質も認められた。模擬という営為を十全に駆使しながら、新たな創造を試みたのである。それを現し得たのは、玄宗の「太平の世」を謳歌した青春と安史の乱後の苦難を共有した妻、二つの喪失への哀惜であった。第四章では、それを明確に把握し得たのではあるまいか。「韋擬」成立は洛陽後期であり、三十代の彼が「太平の世」復興の使命感に駆られながらも、その深刻さに苦悩する姿が浮上する。「古十九」を模擬して女性の独白を借り、隠された主題として、「太平の世」の喪失を詠む。その詩興が下支えとなり、内的拘束から解き放たれて、質量ともに豊かな悼亡詩に結実したのである。

韋應物の悼亡詩におけるノスタルジックな今昔の往還は、失われた時空への旅であり、その旅のよすがとなるのが、従前の悼亡詩の波動をも生み出した母胎というべき「古十九」であった。その模擬（「韋擬」）も含めて、「古十九」の世界との自由な往還が、過去と現在の間隙を埋める連続性を暗示し、彼の今昔の往還を可能にさせたのではないだろうか。それによって、従前の悼亡詩には無い韋應物独自の詩境が構築され、長

期間に亘る詩作が綿々と編まれることになった。その中で先行諸作を過去の時間からよみがえらせ、いわば弦楽五重奏のようにして、韋應物の「悲愴」を響かせたのである。

拙論における「草擬」分析によって、「草悼」が、韋應物詩全体の中でいかに位置づけられるかの一端を考察したが、未だ不十分である。韋應物は、唐代を代表する自然詩人の一人に数えられる。悼亡詩三十三首が、彼の自然詩の中で、いかなる意味を有するかを今後の課題としたい。

## 注

(1) 底本は、四部叢刊所収『韋江州集』。但し、俗字は正字に代えた。対校本として、元刻本影印『須溪先生校本 韋蘇州集』(福建人民出版社、二〇〇八年十月、「元刻本」と称す)。また適宜、以下の三校注本を参照。陶敏・王友勝校注『韋應物集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年九月、「陶注本」と称す)、孫望編著『韋應物詩集繫年校箋』(中華書局二〇〇二年三月)、阮廷瑜校注『韋蘇州詩校注』(華泰文化事業股份有限公司、二〇〇〇年十一月、「阮注本」と称す)。併せて宋・劉須溪先生校本『韋蘇州集』(和刻本漢詩集成第八輯所収)、官板『韋蘇州集』(文政三年刊)、近藤元粹

評訂『韋蘇州集』(嵩山堂藏版、明治三十三年五月)をも参照。

(2) 第一稿は、「韋應物悼亡詩論 序説——十九首への懷疑——」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第三十号、二〇一一年四月)。従来、韋應物の悼亡詩は十九首構成で連作とされてきたが、それに疑義を呈し、新たに悼亡詩として、十一篇を提示した(計三十首)。さらに第三稿で一篇を追加し、拙論の「草詩」対象作は、以下の三十一篇になる(算用数字は、通し番号)。

1 「傷逝」五古十二韻、2 「往富平傷懷」五古十韻、3 「出還」五古六韻、4 「冬夜」五古八韻、5 「送終」五古十二韻、6 「除日」五古四韻、

7 「對芳樹」五古四韻、8 「月夜」五古三韻、9 「嘆楊花」五古四韻、10 「過昭國里故第」五古十二韻、11 「夏日」五古四韻、12 「端居感懷」五古九韻、13 「悲絛扇」五古三韻、14 「閒齋對雨」五古四韻、15 「林園晚霽」五古五韻、16・17 「秋夜」二首五律、18 「感夢」五古四韻、19 「同德精舍舊居傷懷」五古四韻(以上、卷六「感嘆」所収連作)、20 「過扶風精舍舊居簡朝宗巨川兄弟」五古七韻、21 「四禪精舍登覽悲舊寄朝宗巨川兄弟」五古九韻、22 「寺居獨夜寄崔主簿」五古四韻(以上、卷二「寄贈上」)、23 「雨夜感懷」五古四韻、24 「發蒲塘驛沿路見泉谷村墅忽想京師舊居追懷昔年」五古八韻(以上、卷六「懷思」)、25 「經武功舊宅」五古七韻(卷六「行旅」)、26 「郡齋臥疾絕句」五絶、27 「秋夜」五古四韻、28 「對雜花」五古四韻、29 「夜聞獨鳥啼」五絶、30 「子規啼」七絶、31 「昭國里第聽元老師彈琴」七古二韻(以上、卷八「雜興」)。なお拙論其の一、第一章第一節において、新たに32 「冬至夜寄京師諸弟兼懷崔都水」(卷三、五古八韻)を悼亡詩に付加した。

第二稿は、「韋應物悼亡詩論——潘岳の哀傷作品との関わり——」(『法政大学文学部紀要』第六十五号、二〇一二年十月)。潘岳の悼亡詩と比較し、さらに潘岳の「悼亡賦」「哀永逝文」「寡婦賦」という他ジャンルの哀傷作品との関わりを分析した。韋應物は、悼亡詩というジャンルに拘ることなく、詩語・発想・構成・句中の構造を模擬したのである。この模擬性ゆえに、韋應物は詩境を広め得た。

第三稿は、「韋應物悼亡詩論——江淹詩篇との関わり——」(『法政大学文学部紀要』第六十六号、二〇一三年三月)。従前六篇の悼亡詩の中で、独自の詩想を紡いだ南朝宋齊梁・江淹(四四四〜五〇五)の悼亡詩「悼室人」との比較を中心に考察した。また江淹の代表作「雜體三十首」には、「潘詩」を模した「潘黃門 述哀」が含まれている。「草詩」は、「述哀」という「潘詩」の模擬詩を媒介にして、「江詩」を本質的に受容し、「草詩」に少なくない影響を与えたと指摘した。

(3) 拙論中の「古詩十九首」は、古迂書院刊本を底本とし、茶陵陳氏刊本、四部叢刊影宋本を対校本とした六臣註『文選』卷二九所収の作である。また陳・徐陵撰『玉臺新詠』(清・吳兆宜撰『玉臺新詠箋注』四部備要所収)

卷二所収、「古詩八首」および「雜詩九首」（枚乗作とされる）も参照。

(4) 「韋應物詩論——雨の時空——」（『日本文學誌要』第六六号、二〇〇二年七月）六頁。

(5) 各注釈書とは、馬茂元『古詩十九首探索』（作家出版社、一九五七年六月、陝西人民出版社から一九八一年に出版された修訂本は未見）、隋樹森『古詩十九首集釋』（中華書局、一九五八年二月、清・張庚『古詩十九首解』などを収録）、近代の朱自成『古詩十九首』手稿（浙江古籍出版社、二〇〇八年六月）、清・陳沆『詩比興箋』（中華書局、一九五九年一月）は、「枚乗古詩九首」（卷一）「韋應物擬古詩十二首」（卷三）の箋注を収める。

現代の曹旭『古詩十九首与樂府詩選評』（上海古籍出版社、二〇一一年十二月）など。なお「古詩十九首」の研究史とその概要については、注釈書紹介も含めて、李祥偉『走向『經典』之路——古詩十九首』「闡史研究」（暨南大学出版社、二〇一一年十二月）緒論が詳しい。

(6) 「盈盈」は「盈盈一水間」、「皎皎」は「皎皎河漢女」（以上、ともに「古詩十」）、「明月何皎皎」（「古詩十九首」）、「織織」は「織織擢素手」（「古詩十」）に見える。

(7) 柳川順子『漢代五言詩歌史の研究』（創文社、二〇一三年二月）第五章「古詩と古樂府との関係」では、「飲馬長城窟行」が複数の「古詩十九首」と辞句やテーマを同じくするのに対して、「古詩十九首」自体は、「相互に影響関係を持っていない」ので、「古詩十九首」のほうが先に成立したとする（三五三頁）。さすれば「飲馬……」の作者も、①「青青」の詩句に興的機能を看取していたと考えられよう。

(8) 清・黃汝成集釋『日知錄集釋』卷二十一「詩用疊字」。

(9) 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（『中國文學報』第十四冊、一九六一年四月、二九四頁）。

(10) 「古詩十九首」と重ならない「韋悼」の疊字は、以下の通り。

「熙熙」2、「悽悽」3、「寂寂」3、「皚皚」4、「蒼蒼」5、「遑遑」5、「朝朝」6、「冥冥」10・21、「沈沈」12・23、「婉婉」12、「耿耿」15・23、「忡忡」20、「紛紛」22、「慼慼」25

韋應物が「古十九」の疊字を意識しながらも、それ以外の疊字を模索し

た形跡が伺える。

(11) 韋應物の代表作「幽居」など、詩題も含めて、「幽」の字は、一一二例に及ぶ（『全唐詩索引』韋應物卷に拠る）。また韋應物詩に対する評語も「幽深閑遠之語難造」（元・倪瓚『清閨閣全集』卷十）、「意趣幽玄」（明・許學夷『詩源辨體』卷二十三）、「氣太幽」（清・牟願相『小澗草堂雜論詩』など）、「幽」を用いることが多い。

(12) 韋は悼亡詩以外では「青青」を八例、「鬱鬱」を四例用いている。すべてが、「古2」に基づくわけではないが、「唯見草青青、閉門澧水曲」（卷二）、「把酒看花想諸弟、杜陵寒色草青青」（卷三）「青青連枝樹、冉冉久別離」（卷四）、「借問堤上柳、青青爲誰春」（卷六）などは、明らかに「青青河畔草」を踏まえていよう。また「鬱鬱楊柳枝、蕭蕭征馬悲」（卷四）、「夾河樹鬱鬱、華館千里連」（卷五）も「鬱鬱園中柳」を想起させる。さらに「鬱鬱兩相遇、出門草青青（鬱鬱として両つながら相遇ひ、門を出でて草青青）」（卷四）「餞雍聿之潞州謁李中丞」第一聯）は、黄河を渡って潞州（山西省）に赴く友に「餞」する送別詩で、「鬱鬱」「草青青」がともに用いられていることを補っておきたい。当該作は、大曆七年春、洛陽の作とされ、「草擬3」と同一の「百金輕」が認められ、後述「擬古詩十二首」の成立年代（第二章第二節）を洛陽時代後期と証する詩篇の一つである。

(13) 『中國中世文學研究』第二十号、平成三年二月。一七七頁。

(14) 胡旭『悼亡詩史』（東方出版中心、二〇一〇年四月）第二章第二節、中原健二「詩人と妻——中唐士大夫意識の一断面」（『中國文學報』四七、一九九三年十月）など。

(15) 吉川前掲論文注（9）は、蘇武の「古詩四首」其の一以下、八首の用例を提示（二九二頁）。

(16) 『中國詩文論叢』第十五集、一九九六年十月、八・九頁。

(17) 前掲注（5）、七頁。

(18) 前掲注（2）第一章第二節七頁。「驚鴻」は、「韋悼17」「秋夜」其の二にも見え、後述（第四章第三節）の如く、魏・阮籍「詠懷詩」其の一「孤鴻號外野、翔（李善は、「朔」に作る）鳥鳴北林。徘徊將何見、憂思獨傷心」との関わりも深い。

- (19) 前掲注(2)第二章第三節三十三頁。
- (20) 六朝宋・鮑照「代白頭吟」の「直なること朱絲の繩のごとく、清きこと玉壺の氷の如し」に基づく。それを踏まえた唐・王昌齡の「一片の冰心玉壺に在り」(芙蓉楼にて辛漸を送る)も想起されよう。なお鮑照の上の句は、後掲「韋擬11」第七句の典故。また「韋擬1」「韋擬11」以外にも、「韋擬7」には、「草木は知る賤微なるも、貴ぶ所は寒にも易らざることを」(第六聯)に不易の志を看取し得る。
- (21) 詩作の成立年代は、基本的に陶注本(前掲注(1)参照)に拠る。異論のある場合は、それを記す。
- (22) 韋應物の伝記については、傅璇琮「韋應物詩繫年考証」(『唐代詩人叢考』中華書局、一九八〇年一月)、陶注本付録六「簡譜」参照。
- (23) 『古詩十九首賞析』(隋樹森『古詩十九首集釈』前掲注(5)参照)所収。
- (24) 『唐會要』卷六十八「河南尹」に「光宅元年(六八四)九月五日、洛陽州を改めて神州都と為す」とある。
- (25) 前掲注(13)参照。
- (26) 『文学遺産』一九八四年、第四期。
- (27) 韋應物は「清」を好んで用い、特に「清川」「清流」など河川と結びついて時の流れの暗喩を意味する。論者はかつて、韋應物の「清」への志向は、流れゆく時への哀惜に起因していることを指摘した(『韋應物詩論——雨の時空——』前掲注(4)参照。当該詩において、「北邙」から「清洛」への流れは、時間軸の上に生きざるを得ない人生という意味で、繋がっている。
- (28) 第一・二聯は、下平十八尤韻、第三・四聯は、入声二十五德韻、第五聯以降は、入声五質韻。第四句末「蠶」は、『宋本廣韻』では下平二十幽韻とする。余廼永校注『新校互註宋本廣韻』校勘記巻二では、「驚走の貌」と訓じ、「香幽切」とする。ただ「切韻」擬音対照表では、「流拱」に「尤」「幽」が属しているので、通韻させたのだろう。
- (29) 漢の金日磾と張湯。金の官は、侍中・駙馬都尉・光祿大夫など。張の官は、御史大夫・丞相などで、二人はともに漢代高官の象徴。西晋・左思「詠史詩八首」其の二(『文選』巻二十一)で、「金張籍舊業、七葉珥漢貂」と並称されている。
- (30) 後掲「饒雍聿之潞州謁李中丞」(巻四)中の「百金」の阮注は、『史記』巻一〇二馮唐列伝「百金之士十萬」集解曰、「良士直百金也」を引く。
- (31) ②「遐曠」は、「韋擬8」と「登高」の二例のみ。⑩「丹霞」は、「韋擬4」「登高」と、後出「同德寺閣集眺」の三例。同德寺は、洛陽郊外にある。
- (32) 韋應物は、洛陽丞の辞職後、郊外に閑居し、その後、長安に帰郷した。揚州への旅は、長安から出発した。「洛陽前期」にはその実、長安も含まれる。
- (33) 「韋擬」中の詩語と同一の詩語を用いている(1)に属す主な詩篇は、以下の通り。「韋擬1」…「不遑息」「趨府不遑安」(「趨府候曉呈兩縣僚友」巻二)・「嚴冬霜」―「晨登嚴霜野」(「送閻案赴東川辟」巻四)、「韋擬3」…「垂楊」―「垂楊拂白馬」(「貴游行」巻九)・「久要」―「何因知久要」(「贈李儋」巻二)、「韋擬4」…「氛氳」―「千歲心氛氳」(「任洛陽丞請告一首」巻八)、「韋擬4・6・7」…「千里」―「子有千里行」(「送令狐岫宰恩陽」巻四)、「韋擬5」…「緘情」―「緘情寄舊遊」(「答李潛」巻五)、「韋擬6」…「草木」―「和風被草木」(「送令狐岫」)、「韋擬9」…「燕趙」―「英豪燕趙風」(「送崔押衙赴相州」巻四)・「反側」―「反側候天旦」(「夏夜憶盧嵩」巻六)・「空前庭」―「庭前空倚杖」(「期盧嵩枉書稱日暮無馬不赴以詩答」巻五)・「雙涕」―「一望雙涕流」(「酬鄭戶曹驪山感懷」)、「韋擬11」…「天一方」―「送子天一端」(「送閻案」)・「萬里」―「日照萬里晴」(「贈盧嵩」巻二)・「龍鳳」―「誤觸龍鳳嘯」(「贈李儋」)・「漆以固」―「絲白漆亦堅」(同上)。
- (34) 「韋擬」中の詩語と同一の詩語を用いている(2)に属す主な詩篇は、以下の通り。「韋擬1」…「流水」―「流水十年間」(「淮上喜會梁川故人」巻一)・「朔風」―「雁初晴下朔風」(「自鞏洛舟行入黃河即事寄府縣僚友」巻二)・「容髮」―「宿昔容髮改」(「淮上即事寄廣陵親故」巻二)、「韋擬2」…「久別離」―「苒苒久別離」(「喜於廣陵拜觀家兄奉送發還池州」巻四)、「韋擬3」…「京國」―「所念京國遠」(「廣陵遇孟九雲卿」巻五)、「韋擬3・12」…「白日」―「白日下廣津」(「大梁亭會李四栖梧作」巻二)、「韋擬3・9」…

「平生」―「豈要平生親」(「大梁亭會」)。

- (35) 当該作は、「日暮れて洛京を懐はん」(第六句)と雍聿の旅路での思いを想像し、洛陽が出発地であることを物語る。雍聿については、傅璇琮「韋應物繫年考証」が、「雍聿之」は、「雍裕之」で、「蜀の人、詩名有り。貞元後、数々進士に挙するも第せず、四方に飄零す」(『唐才子傳』卷五)など引用参照。「李中丞」とは、陶注に拠れば、李抱真で、御史中丞を任じたのは、大曆四年以降という。したがって、当該作の成立は、韋の揚州旅行以後の洛陽時代(3)と考えられる。

- (36) 「草擬」中の詩語と同一の詩語を用いている(3)に属す主な詩篇は、以下の通り。「草擬1」:「朔風」―「還因朔吹斷」(「賦得浮雲起離色送鄭述誠」卷四)・「嚴霜」―「嚴霜晨淒淒」(「同長源歸南徐寄子西子烈有道」卷二)・「草擬3・5」:「芳時」―「芳時坐離散」(「送李儋」卷四)・「草擬4・12」:「徘徊」―「徘徊洛陽中」(「送洛陽韓丞東游」卷四)「草擬5」:「嘉樹」―「縵繞帶嘉樹」(「遊龍門香山泉」卷七)・「雲路」―「雲路遶且深」(「送洛陽韓丞」卷四)・「緘情」―「緘情未及発」(「酬李儋」卷五)・「草擬6」:「草木」―「草木同時植」(「洛都遊寓」卷七)・「草擬6・9」:「好鳥」―「好鳥始云至」(「再遊龍門懷舊侶」卷七)・「草擬9」:「孤景」―「淒清孤景擬」(「酬韓質舟行阻凍」卷五)・「草擬11」:「萬里」―「如彼萬里行」(「同長源」)・「草擬12」:「空闌」―「孤妾守空闌」(「同長源」)。

- (37) 「同徳1」以外の六首は、以下の通り。2「同徳精舎養疾、寄河南兵曹東廳掾」、3「同徳寺雨後、寄元侍御李博士」、4・5「同徳閣期元侍御李博士不至、各投贈二首」(以上、卷二)・6「李博士弟以余罷官居同徳精舎、共有伊陸名山之期。久而未去。枉詩見問。中云、宋生昔登覽。未云、那能顧蓬華。直寄鄙懷、聊以爲答」(卷五)・7「同徳精舎舊居傷懷」(「韋悼19」卷六)。なお傅璇琮氏は、同徳寺は、洛陽の丞辭職後の閑居先とするが、採らない。拙論では、陶注に従う。

- (38) 「上は浮雲と齊し」と高さを誇示し、「交疏結綺(透かし彫りの綾模様で飾られた)の窓」、「阿閣(四面に軒のある東屋づくりの楼閣)三重の階」。
- (39) この「      を吐く」という表現は、「草擬5」にも②「靡蕪(香草)幽芳を吐く」と見え、「草擬」と同徳寺の関わりを看取し得る。

韋應物 悼亡詩論(承前)

なお「吐月」は、梁・吳均「疎峰時吐月」(「登壽陽八公山」)、唐代では、李杜にも用例がある擬人化用法。

- (40) 孫望「繫年校箋」は、貞元二年秋、江州刺史の時の作(卷八)とするが、根拠は示さない。

- (41) 三観点は、無論、相互に関連するが、「古十九」「草擬」「草悼」三つ巴の複雑さを少しでも整理せんがためである。

- (42) 「草擬1・7・8」―冬、「草擬2・3・5・9・12」―春、「草擬4・6・10」―秋。「陸擬3・7」―冬、「陸擬4・5・11」―春、「6・12」―秋。

- (43) 「若」は、底本・元刊本などは、皆「苦」に作り、官板『韋蘇州集』・嵩山堂版は、「若」に作る。拙論では、後者をとる。

- (44) 「草悼20」「過扶風精舎舊居、簡朝宗巨川兄弟」も、妻とかつて住んだ旧居に立ち寄り、妻の兄弟に対して「芳時は去りて已に空し」と哀嘆するのは、孤独な「今」との対比として、すでに例示した(第一章第二節)。

- (45) 詩題は、「蒲塘駅を發し、沿路泉谷村墅を見、忽ち京師の旧居を想ひ、昔年を追懐す」。

- (46) 「平生」は、ほかに、「宴別幼遐與君祝兄弟」(卷四、九韻)という、妻の弟元錫(字は君祝)たちと親友李儋(字は幼遐)との送別の宴の詩にも見える。

⑮ 平生有壯志 平生 壯志有り

⑯ 不覺淚霑裳 覺えず 涙 裳を霑す

⑰ 況自守空宇 況んや自ら空宇を守るをや

⑱ 日夕但彷徨 日夕 但だ彷徨す

「平生有壯志」は、既出(第三章)「草悼4」「冬夜」の「晚歲 夙志淪ぶ」の「夙志」を意味する。また送別会とはいえず、「涙霑裳」は、「古19」の「涙下りて裳衣を沾す」を踏まえ、「草悼24」の「涙裾に盈つ」と類似する過度の愁嘆表現である。やはり妻の兄弟ということに起因するのであろう。さらに「空宇」は、「寡婦賦」に基づき、「草悼17」に「歲晏 空宇を仰ぐ」と詠う。日暮れて彷徨する詩人の姿は、「夢想に忽ち睹るが如く、驚起して復た徘徊す」(「草悼1」)など、「草悼」に酷似する。したがって、当該作を「草悼33」として認めたい。

(47) 「朔鳥」とするのは、李善注『文選』卷二十三。六臣注、その他のテキストは、「翔鳥」に作る。「朔」の方がより類似しており、韋の見たテキストは、李善注だった可能性が高い。

(48) 「四禪精舍」は、『寶刻叢編』卷二十に「天宝十一年」(七五二)の建立とあるが、その刻石地は、未詳(陶注)。ただ「温泉」「馳道」の詩語から、昭應泉驪山の華清宮に近い仏寺と考えられる。

(49) 鴿は、仏寺と縁が深く、『洛陽伽藍記』卷五、城北に「尸毘王が鴿を助けたところに寺を建てた」という記事がある(阮注)。また北魏で中書令・国子祭酒を務めた崔光は、晩年、熱心に仏教を信じ、あるとき門下省で読経していると、鴿が飛んできて、膝の前に止まり、長い間、懐に入ったり、肩に乗ったりしたという(『魏書』卷六十七)。同じく北魏の王崇は、親孝行として有名だが、母の死後、殯室で昼夜慟哭していると、鴿の群れが飛来し、その中の白くて黒目の小鳥は、朝夕去らず、彼に寄り添ったという(『魏書』卷八十六)。この話に拠れば、鴿は、亡き妻の化身と考えられよう。

(50) 現行十卷本の編成は、北宋・王欽臣に拠る(嘉祐元年(一〇五六)の序文)。卷六「感嘆」に収録された悼亡詩が「十九首」にまとめられたのは、王欽臣が「古十九」との関わりを意識していたのではないだろうか。

(51) 前掲注(14)、六十頁。

(52) 『日知録集釋』(前掲注(8))卷二十一「詩體代降」。顧炎武は続けて「不似則失其所以爲詩。似則失其所以爲我。李杜之詩、所以獨高於唐人者、以其未嘗不似、而未嘗似也。知此者可與言詩也已矣。」と説き、「摹倣」の意味と危うさを指摘する。